

---

# チェーンソーの後に

大太 勘垣

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

チエーンソーの後に

### 【Nコード】

N8163M

### 【作者名】

大太 勘垣

### 【あらすじ】

ホラー・スプラッタ映画が好きすぎる女子高生の”シラリア”。毎日、誰にも理解されるはずもない妄想に耽りながら高校生活を送る彼女は、ある日、不思議なビデオテープを入手する。その内容は次代の連続殺人鬼を決めるコンテストへの参加招待状だった！

ジェイソンなどを代表する”スター”達への憧れを抑えきれないシラリアは、夏休みの初日を迎え、とうとう決心する……。

非日常から日常へ。  
惨殺ボーイミーツガール。

## プロローグ（前書き）

この小説には暴力・残酷・グロテスクな描写がたくさんあります。  
このような描写が苦手な方は閲覧をお控えください。  
素人丸出しの文章を不快に感じる方もお控えください。

## プロローグ

けたたましいドラムロールが響く。  
生演奏とは違ったスピーカーから流れる音が、その場にはひどく似合っていた。

「今回の優勝者は……3番！長野県からお越しくださいました、  
昼間のボマー”さんです！おめでとございます！」

司会者の叫びに、激しい歓声が応えた。見物人である老若男女問わず全ての人間の声である。それは奇声にも似たものであった。  
会場内は薄暗く、唯一の光源と言えばステージに立つ出場者たちが浴びているスポットライトのみ。その光も今は一人を照らすために小さくなっているため、観覧席はもはや暗闇と同化していた。

「いやあ～お見事でしたね。」

“昼間のボマー”と呼ばれた男が司会者からマイクを向けられる。

「はっはっは。やっぱり最終ラウンドに残っただけあって、みなさん中々のものでしたよ。」

眼鏡をかけてスーツを着た痩せぎすの男。一見すると、ひ弱な商社マンにしか見えない彼は驚くほど饒舌であった。

「けれどやっぱり僕の読みどおりでしたね。現代の科学においては、  
力にこだわる必要もないんですよ。」

と、満足そうに切れ目の眼鏡を上げた。

「なるほど。確かに終盤の87番”トウース・ハンター”さんとの一騎打ちは見事なものでした！」

「ありがとうございます。僕も最後の人が一番楽しかったですね。」  
そう言って、足元に転がる胴体を蹴りつけた。

「それにしても怖いですねー爆弾というものは。」

「爆弾、なんて呼び方はやめていただきたい。ひとつひとつが僕自身なのですよ。」

「ほほう……その威力は皆様も御承知の通りですね！」

司会者がおもむろに男の足元に転がった胴体を拾い上げる。

「ご覧ください！これから彼はどうやって得意の咀嚼をすればよいのでしょうか!？」

高々と掲げ挙げられた下半身のなくなった男の死体。

その顔は未完成の福笑いのようにひしゃげていた。

だらしなく繋がったままの舌と、爆発によって吹き飛ばされた歯が口内のそこかしこに突き刺さっていた。

ゲラゲラゲラ……観客の笑い声が響く。

「それでは、今回はこのへんでお開きといたしましょう。”昼間のボマー”さんのこれからの活躍を期待して、皆様方、今一度大きな拍手をお願いします!！」

拍手だけでは物足りないのか、地を蹴る音が響く。

それだけ場内は昂ぶっていた。

商社マンは気をよくしたのか、大手を広げて劇役者のように振る舞う。

「ありがとうございます。明日からは早速、華やかなショーを

」

”音声資料：九畝 明との会話”

「連続殺人鬼？僕が？」

「違うのですか？」

「……貴方がたの恐怖の対象になるのは構わないが、僕をそう呼ぶのはやめていただきたいな。」

「と、いっは？」

「僕はそこらの愚鈍な輩と違って、信念があるのだよ。」

「信念……ですか？」

「君らが殺人鬼と呼ぶものは、字の如く、人を殺める鬼のことだろ  
う。」

「そう、でしょうね。」

「僕は鬼みたいに狂ってはいないし、物事の分別もつく。大体ね、彼らの行動の目的は何なのだろうか？」

「まあ……。」

「さあ？君はそれでも警察なのかい？」

「警察じゃなくて、探偵ですよ。さつき名刺を見せたでしょう。」

「……肩書きがそんなに大事かい？どちらも市民の安全を守る務めには変わらないのだろう？案外、君みたいな人が連続殺人鬼なんて呼ばれたら喜ぶのかもしれないな。」

「いえ、どうでしょうか……それより、目的がどうしたんですか？」

「ああ、失礼。そうだった、目的だよ。美学と言ってもいい。彼らの行動には何も感じられないんだよ。」

「共感できないということですか？」

「全くわからないね。欲望を満たすだけの行動のどこに美学がある？」

「あなたの犯行は欲望を満たすためではないと？」

「僕のは”役目”だよ。」

「”役目”？」

「エンターテイナーとして、必要な役目をしているんだ。」

「それは……一体どういう意味ですか？」

「戦争と同じさ。誰かが泣けば、誰かが喜ぶんだよ。」

「あなたがやったことも誰かが喜ぶのですか？」

「エンターテイメントだと思うね。誰かが死ぬと、マスコミも喜び、君みたいなのも仕事ができるだろ？」

「いえ、私のは個人的な調査というか、好奇心と言いますか……。」

「そうだったのは”僕”という人物がいたからさ。」

「まあ、確かに。」

「影響はどこかに必ず表れるものなのだよ。」

「なるほど……。例えば、あなたをヒーローのように崇めているファンサイトなんてのもありますね。それもエンターテイメントのー環ということですか？」

「ああ、まあ、そういうことなのかな。ヒーローなんて呼び方は虫唾が走るけどね。ヒーローは正義の味方ってことだろ？僕は別に味方なんてしてないね。あえて言うなら……正反対の味方？」

「……？」

「ふむ……あまり、じっくりこないね。そうだな……正義の反対は何だろう?」

「……悪、ですかね。」

「いいや、違うね。正義の反対は”また別の正義”なんだよ。だから僕は後者の味方をしているだけさ。」

「うん……悪の正義、ということですか?」

「うん、変な言い方になっちゃうけど、そういうことかな。みんな現実に刺激がほしいのさ。だから僕はそれに応えるんだ。」

「こんな平和な世界で?」

「平和?今のどこが平和なんだい?そもそも平和なんて状態は何もないことを指すんだよ。それこそ実にくだらない。」

「だからこそ、あなたがヒーローを演じたと?」

「……。」

「あ、すみません。えっと……その……スター?」

「ん!?そう!スターだよ!映画の登場人物みたいなねえ。」

「つまりは……あなたは悪役になりたかったと。」

「ははは、そうだね。悪役がいることで君らも正義を信じられるだろ?僕はそうだった。ん?もう時間ですか?」

「そのようですね。本日は大変貴重な

」

「いや、ちょっと待ってくれ。まだ話は終わってないんだ。いいだろう？」

いえ、すぐに終わりますよ。」

「いえ、私はもう

」

「探偵さん。」

「はい？」

「誰もが一度は映画のスターに憧れるだろう？僕はね、そういった集団から選ばれたのだよ。」

「……。」

「ただ、僕のはちょっと違うものに憧れただけなんだ。」

「……それは？」

「君もよく知っているだろう？有名なハリウッドスターさ！」

「すみません、あまり映画は

」

「ははは！いつ襲われても知らないよ？」

「それは映画の登場人物であって現実には

」

「ほらほら、君がどこに逃げてもすぐに追いついて、足首を掴むん

だ。やっと車に辿り着いたみたいだが、エンジンはもちろんかからないよ。まるで魔法みたいじゃないか！！」

「行平さん……?」

「お? かかりそうだね? かった!? でももう遅いよ! 後ろを振り返ってごらん! そいつが荒い息をしながら」

連続殺人鬼” 昼間のボマー”、ゆきひら 行平 としおみ 俊臣

面談から17分後、自らの奥歯に仕込んだ小型爆弾により死亡

## プロローグ（後書き）

ここまで読んでいただき、ありがとうございます。

物語はまだなんも始まってないですね。

プロローグの終わりと言ったところでしょうか。

チエーンソーは元々、短編の予定でした。

伏線いらすのあっさりとした作品にするつもりでしたが、書いていくうちに長々と…

何分、私がド素人の為、誤字脱字が目立つとは思いますが、飽きずに楽しく書いていきたいので温かく見守ってくださいよう、お願いいたします。

読んでくれた方はぜひとも感想をお願いします。

- 48時間(前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の、実在もしくは歴史上の人物、団体、地域など、その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であつても何の関係もありません。

映画が大好きだ。

恐らく、私の人生は人と話すより、映画鑑賞の時間のほうが長いのもかもしれない。それだけ心酔していた。

だからと言って人付き合いが苦手ではない。必要性とか価値の天秤で量った場合、映画のが勝るだけだ。

ヘッドホンから女性の甲高い悲鳴が聞こえた。

「あ、きた！」

(ふふふ、どんな手段で逃げようとも無意味なのに。)

ホッケーマスクを被った男が女性の足首を掴んでいる。

液晶画面の向こうには予想通りの展開が待ち受けていたが、それでも私の興奮は増していくばかりだ。

「む、やはり首から上を切り落とすくらいしないと安心できないね。」

腕の力だけでここまで這ってくるとは。瞬間移動もいいところだ。恐怖と苦痛にひきつった女性の顔がアップになる。

さあ、さあ、さあ！いよいよクライマックス……！というところで、突然ヘッドホンが私の頭から離れた。

「いらあっ！」

「ぎゃあっ！」

突然の怒号に私は座ったまま後ろに倒れこんだ。  
何が起きたのか、自分が今どんな状態にあるのかわからなくなる。

「朝ごはん！」

倒れた先には姉の顔があった。

「おね、お姉ちゃん？」

そんな私を見て、心底疲れたようにため息をつく。

「全くあなたは朝からこんな見て……。」「

あまりの出来事に気が動転していて、何も話せない。心が宙を舞っている状態だ。

「B級作品の一体どこが面白いのかしら……。」「

その発言だけで私は蘇った。

「い、いいじゃない別に！そんなことより、いちいち驚かせないでよー！」「

「ホラー映画見てる奴が言っなっ！」

……仰る通りだ。恥ずかしいから顔を背けてしまう。

「で、用件はなに？そっちこそ朝からでかい声で何なのよ……。」「

今度は頭を掴まれ、真正面に向けられる。にこっとした笑顔が最

高にホラーだ。

「あ、ああ、朝ごはんですわね！すぐに参ります！」

これ以上身内の怒りを買っても得はない。

立ち上がると、すぐに着替えを始める。私にとっては毎朝の通過儀礼のようなものだった。

私は姉と気ままな二人暮らしを続けていた。

今まで住んでいた孤児院を抜け出して、二人で生活していく、と姉が言ったときはどうなるかと思っただが、意外とうまくいくものだ。大変なことと言えば、私がビデオやDVDを見てばかりなので、その度に姉が怒ることだ。

私としては、映画鑑賞をしているだけなのだが、姉にはどうも受け入れてもらえない。「女の子がそんなもん見るなんておかしい」と、何度も言われている。そう言われても当然やめるつもりはないので、姉が諦めてくれるより解決策はないのだが。

食卓では、フォークでハムエッグを突く音と、トーストに噛り付く音がしていた。トーストはやはり8枚切りに限る。トーストとは薄いものだからこそ美味しいのだ。

「あんた明日から夏休みだっけ？」

「そうだよ。」

何ともなしに返事をしたが、私自身忘れていた。明日からは昼夜問わずに見放題だ。何人たりとも邪魔なんてさせるもんか。あのシリーズを見続けて見続けて…

「ハロウィン」なら私の部屋にあるよ。」

「え？」

心底驚いた。

「お姉ちゃん、ホラー映画なんて……」

「……私だって映画くらい見るわよ。」

顔が真っ赤だった。姉のそんな姿を見てしまい、つい、顔がほころんでしまう。

姉はそんな私に気付いたのか、咳払いをひとつして口を開いた。

「私、仕事の都合で今夜から当分帰れないから。」

「それはそれは……って、本当!？」

姉は仕事で忙しくなると、外泊する習性がある。家にいると集中できないらしい。そのために何週間も家を空けることは珍しくなかった。そうなると、必然的に私の映画鑑賞の時間が増え、至高の夏休みを過ごすことができるのだ。

「……うれしそうだね。」

「そりゃあもう！邪魔が入らないわ雑音が聞こえないわでもう。」

突如、目の前が真っ暗になった。ほのかに漂う香りは……

「パンはまだ余ってるけど？」

どうやら食パンを顔に投擲されたらしい。

「……焼いてくれたほうが好きかな。」

「それじゃあ先に行くよー。」

未だに馴染まない革靴を履きながらリビングへ声をかける。いつもと違って彼女はお昼に出発するらしい。

「はいよー。あんまりB級ばかり見ないようにねー。」

む……何たる言い草。私にとってはSS級なのだから、死ぬほど鑑賞してやろう。

「はいはい。」

ドアを開く。玄関に光が差しこんだ。

「行ってきましたお姉さま。」

普段絶対に口にしない言葉を告げる。私が帰るころにはもう邪魔はない。それほど気分が高揚していた。

ふと振り返ると姉が腕を組んで紫煙を燻らせて立っていた。相変わらず凜々しい美しさを持った女性だ。家ではどこか抜けているところがあるくせに、その目は力強さを秘めていて、男性とは違う女

性特有の頼りがいがある。

「またね、シラリア。」

私は姉が大好きだった。

当然、シラリアは本名ではなく、私が周囲にそう呼ばせているだけだ。自分なりにおかしいとは思うが、本名を呼ばれることがどうしても慣れない。好きではない。

ごく自然な挨拶を交わした、朝だった。

- 31 時間（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の、実在もしくは歴史上の人物、団体、地域など、その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であつても何の関係もありません。

「で、明日から夏休みが始まるわけですが」

終業式という名の退屈極まりない行事。

話を聞く人などいないのに、どうして彼らは喋り続けるのだろうか。

生徒を体育館に集めて説教とも授業にもならない話をする。これも一種の殺人ではなかるうか……。

……ん？待てよ……。

校舎の一角に生徒を集める。

学校内に不協和音を流す。それも微かに。超高音で、脳を揺さぶる。

その旋律には、脳みそを溶かす効果があつて……。

「シラリア？」

ふふふ、中々良いかも。

そして”私”は、どろどろに溶けた脳みそを嚼るのが大好きで……。

「ちょっとシラリア！」

生徒の口や耳から垂れた脳を、こうジュルジュル……と。

そうになると”私”は学校の先生かな？

格好良くタクトなんて握らせちゃおうか！

そうだ、段々とポリリュームアップしていこう……！

ああ、なんてことだ！今日はこんなにも頭が冴えわたっている！

「こら、変態！」

む！何を言う！”私”は崇高なるアーティスト　そこで初めて横から肩を突かれていたことに気付いた。

友人のアヤノだ。無視することもできないから、せっかくの構想も中断しなくては。

「何か用？」

精一杯の不機嫌さを最小の声に変換して答える。

「……まずはその涎を拭きなさい。」

そう言つて黄色のハンカチを渡してくれた。このお団子ロリは、その容姿から想像することのできないくらい世話焼きな性格をしている。私の性格を知っている彼女に悔しいことによくお世話になっていた。彼女は、私の趣味を知っている数少ない友人ということだ。

「全く、あんたはその欠点がなければねえ……。」

本当に残念そうに肩を竦めた。

「はいはい。で？私の思考を遮つてまでするような用件なのかしら？」

「いやさ、終業式終わつたらどこかでお茶でもしないかなーって……」

この女は……本当にくだらない。別に今話す事ではない。

「悪いけどパス。今日は見たい映画があるから。」

「……あなたは、本当に、もう……。」

と、深い溜め息をつかれてしまった。今日はよく溜め息を聞く日だ。

「その趣味さえなければ学校一のアイドルにもなれるってのに……。」

「……はいはい。」

一応、世間体は考えているつもりだが、そういう話には一切興味がない。恋愛対象の道具にされることの楽しさが私にはまだわからなかった。

「この前だって、副会長と喧嘩したんだって？」

「あれは喧嘩じゃなくて、私の意見を伝えただけだよ。新入生を捕まえて、校則違反だと騒いでいるのがうるさくてさ。しかも、その上であんな短いスカート履いているほうがおかしいでしょう？それを指摘しただけ。」

「でも、相手は先輩なんだからさ……。あなた、あれからあの先輩グループに目をつけられてるんだよ？」

「わあ、それは光栄だね。」

「樂觀的だなあ……。」

「アヤノちゃんは、難しい言葉を知っているねー。」

頭を撫でようとした途端、思いきり振り払われてしまった。相変わらず慎重に似合わず、子供扱いされるのが嫌いみたいで安心した。

「でもなあ、どうしてこんなに人望があるのか。どうして私だけがシリリアの本性に気付いているのか……。こんな性格でも群がってくる男の気持ちを知りたいよ、本当に。」

「蟻に群がられる砂糖の気持ち、考えたことある？」

そのまま何となくアヤノと雑談しているうちに先生方の有り難いお言葉も終わった。全くタメになった。おかげで新しい殺人鬼も浮かんだのだから。誰か映画化してくれないだろうか。

「ねえ〜シリリアってば〜。」

仏様を拝むように懇願するアヤノ。帰り支度をしているときも勧誘は終わらなかつた。そして、現在は下駄箱まで来てしまった。

ここまで誘いたいほどの新しい喫茶店でもできたのだろうか……？改めて断ろうとしたとき、

「アヤノちゃん〜ん。」

という声が後ろから聞こえた。振り返ると、設楽が手を振りながら歩いてくるところだった。

「し、設楽くん!!」

アヤノの声が1トーン上がる。

「ごめんね、部活のミーティングが長引いちゃってさ。待った？」

「ううん!全然!もっと待っていてもよかったかな!」

その光景を見つめる私。なるほど……アヤノの狙いがわかった。

設楽 シュン……バトミントンの期待のコースで、成績優秀、父親は有名な映画監督(私も何度かテレビで見たことがある)。所謂、イケメンという部類……らしい。ファンクラブも存在している。しかも、当然私にとってはただの女たらしという印象しかない。

「……うんうん、すっごく楽しみ!……はっ!」

私の冷たい視線に気づいたのか、アヤノが秘密会議を迫ってきた。

「はあ……。設楽くんからのお誘いってことね。」

「そういうこと!設楽くんから誘われたのよ!?あんだだっただまには男と遊んだほうがいいのよ!」

「自分が遊びたいだけでしょうが!」

言うまでもなく、アヤノもファンクラブの一員だ。そしてバトミントンのマネージャーという争奪戦もいつの間にか勝ち取っていた。

「一人で行きなさいよ一人で！私がいたら邪魔になるでしょ！？」

「二人きりで何を話せばいいかわからないもん！」

このロリはこういう場合、恥じらう乙女に成り下がる。こういうところが子供扱いされる原因なのに、未だこの子は気づかないのだろうか。

「アヤノちゃん、そろそろ行かないかい？」

世話しなくそんなに長くもない髪をいじっていた設楽が話しかけてきた。

「はい！今行くね！シラリアも興奮しちゃってるみたいで！」

「ちょっとこちら……アヤノ！」

……聞いてないな。仕方ない。行くだけ行って、すぐに帰るとしよじ。

「へえ〜君がアヤノちゃんの友達？俺のファンだってね、光栄だなあ。」

とつさにアヤノを睨む。この女は友達をなんだと思っているのだろうか。しかし、アヤノの手前、否定するわけにもいかないか……。

「……初めまして、設楽くん。今日はよろしくね。」

「ははっ、こちらこそよろしくね。えーと……」

私の名前、アヤノは言っていないみたいだ。それに気付いたのか、アヤノが割って入ってきた。

「あっ、シラリアっていうの。なぐんでか、本名で呼ばれるのが嫌いらしいんだよね。だからそう呼んであげてね。」

「ふーん……なるほど。それじゃあよろしく、シラリアちゃん。」

そう言っただけで設楽は歯を覗かせた。「ちゃん」は余計だった。ああ、今すぐ帰りたい……。

「それで今はバルキスの定理ってのを解いてるんだよ。これがどうも難解でねえ。」

「へえ、外国のお土産が数式なんて……設楽くんのお家って博識なんだね。」

アイスココアに浮かんだホイップクリームをストローでいじる。

……そうか、数式で人を殺すってのはどうだろうか。ある数学者の定理が、実は殺害方法を数字で表しているものであって……みないな。

そう言えば、円周率の謎を解く映画があつたような。む、ということとは若干パクリになってしまっただけ……残念。

「休日はお菓子作りしてるかな？これが意外と楽しくてさ。」

「きゃー素敵っ！設楽くんならスイーツ職人も似合うよ。」

クリームを口に運ぶ。

人体でお菓子作りってのはどうかな。肉屋さんを経営してたりってのは聞いたことあるけど。そもそも人肉でケーキ作れるのかしら……スイーツ・マーダー……。

「今度、親父の新作を手伝うことになったんだよ。」

「きゃーすごいすごい！私、設楽監督の作品すっごく好きなの！」

お皿にきれいに盛られたワッフルを覗く。

シンプルにスイーツを求めてお菓子職人たちを殺していくっていうのもいいかも……。無防備なワッフルにフォークを突き刺す。

(そうだ、もっとワッフルを寄せ！さもないと……!!！)

「シラリアー！」

そう、お前の目玉をショートケーキにのせて……

「ちよつとシラリアー!!！」

甘美なるスイーツ職人から、何も無い”私”に戻される。現実世界では4つの目玉が私を見つめていた。

「あ、ごめんごめん。」

また悪い癖がでてしまったようだ。

「もう！設楽くんの生活に興味ないの!?!」

ないです、これっぽっちも。

「まあまあ、アヤノちゃん。シラリアちゃんは興味ない？映画？」

あります、私の映画だけ。

そういえば……

「設楽くんのお父さんってどんな映画作ってるんだっけ？」

何とか賞を受賞したというのはテレビで何度も見かけているが、それ以上はあまり覚えていなかった。

と、いうのも全くホラーなテイストではなかったからだ。

アヤノが隣で、いかにも何か言いたそうな目を向けてくる。向かいの設楽も髪をいじる動作を止めていた。

「俺の親父はロマンスだからね。この前に賞をとったのも”キスは罠”っていうラブロマンスで……。」

あゝそうだ。思い出した。何だか恋人同士が甘ったるいだけの逃避行を繰り返す物語だ。タイトルとパッケージを見て、すぐに忘れたんだ。

「それって誰かが死んだりする？」

不躰だとは思うが一応聞いてみる。

「それがさ！最後のシーンで主人公の友達がねえ、これまた切ないんだけど……。」

「通りすがりのチェインソー男に殺されたり!？」

「……い、いや、友達のために自ら崖から身を投げるんだけど……。」

「つ、つまらない……。わざわざ映画で、しかも最後に殺害シーンを持つてくる必要があるのが全くわからない。」

「そんな私の空気を感じ取ったのか、アヤノが慌てて口を開く。」

「すごい良かったです！」隆司”が”由香里”のために身を引くのよね！もう映画館で泣きっぱなしだったよう。」

「そう言ってもらえたらうれしいな。実はあのシーン、俺が考えた案でさあ……。親父には話半分に聞いてもらったつもりんだけど、やけに盛り上がったちゃってね。」

「ええ！？すごいすごい！もう感激っ！もしかして今度の新作は……。」

盛り上がる2人を置いて、またもや妄想に耽る。

「……来るんじゃないかった。頭の中の殺人鬼たちは声を揃えて呟きだした。」

私が開放されたのは、もう夕方のことだった。が、しかし、開放といっても喫茶店を出ただけだ。

現在は人通りが少ない住宅街を3人で並んで歩いている。「送っていくよ」という設楽の誘いをアヤノが断るはずもなく、私も一緒に付き合う形にさせられてしまった。

「設楽くんの脚本なら絶対に売れるって。私もう泣く準備できて

るもん！」

「いやあ、まだわからないってば。」

どうやらアヤノはすっかり設楽に慣れたらしい。やっぱり私がいなくても良かったんじゃないか。

この時間帯、いつもならレンタルビデオ屋さんのワゴンのB級映画を漁っているというのに、どれだけ無駄な時間を過ごしていることが。

「……あれ？」

「どうかした？」

「あそこの人……何やってるのかしら？」

アヤノの視線は公園に向いていた。今では全くといっていいほど、子供が遊んでいる姿なんて見ない、廃れた公園だ。

その小さなジャングルジムの隣に、奇妙な光景があった。

黒の上下のスーツに身を包み、ネクタイを締め、異様な笑顔をした仮面を被った人物。それがダンボール箱を並べて、パイプ椅子に座っていた。背中の中古ぼけた旗には「movies」と書かれている。

「やだ……ホームレス？」

「……の露店みたいだな。moviesって……ビデオでも売っているのか？」

嫌悪の眼差しを向ける2人とは裏腹に、私は心を惹かれていた。

あの風貌、しかもこんな場所でビデオなんて…… B級の匂いがする！

「あ、シラリア！待ってよ！」

自分の直感を信じて駆け出す。世間体など気にしていられるか！

案の定というか、ダンボール箱の中にはビデオテープがぎっしりと詰まっていた。

よく見ると、旧作から新作までありとあらゆる作品があった。その中に私の眼には一際輝く光が見えた。これは……！

「これ、これ探してたあ！」

行きつけのレンタルビデオ屋には置いてなかったのに！

あのだらけた店長に何度頼み込んだことか！いつその事アルバイトでもして仕入れてやろうかと思っていたのに！それがパッケージのまま！！今ここに！

と、うれしさからつい声を上げてしまった。

待てよ。と、いうことは……

「す、すみません！」

「はいよ。」

仮面の人物はカタカタと人形が動くように顔を向ける。その声は想像とは違って、意外と若い男のものだった。

「殺人六法”ありますか!?”」

「ん?” Redrum’s Law”のことかい?”」

「それです！ごめんなさい、邦題で言ってしまいました！」

「それなら……どこに行つたっけなあ。」

顔はこちらに向けたまま、箱に手を突っ込んで探す。そして、「あつ」と小さな声を上げて、

「あつた、あつたよ。」

叫びだして、走り回りたくらいの衝撃があつた。

手に取ると空に高々と掲げた。頭の中にはファンファーレが鳴り響く。私にとっては聖剣に等しいほどの価値があつた。

「あはは、可憐なお嬢さんだつてのに意外とコアな作品が好きなんだね。」

それに驚く素振りも見せず淡々と語る男。

「そりゃあもう！ずっと探してたものが2つも手に入るなんて！」

私はまさに有頂天だった。これほど喜ばしいことはない。

「そういう作品がお好みなら……おや、いらっしやい。」

男の首がカタカタと動き、私の後方を見た。

「なんだあ？全部ホラーばかりじゃないか。」

振り返ると、設楽と、その後ろに隠れたアヤノがいた。

「シラリアちゃん、俺の家に来ればもつと良い作品たちがあるよ。こんな危ない店で買うより、家に来ればいくらでも貸すからさ?」

「シラリア、設楽くんの言うとおり、もつ行こうよ。」

アヤノは小さい身体を更に小さくして言った。

「したら……? ひよつとして設楽監督の?」

仮面の男が目を見開いて(そのように見えただけだが)尋ねる。設楽は少なからずその発言に気を良くした様子だ。

「そうさ。さすがに君みたいな人でも知ってるみたいだね。俺は何を隠そうその長男の……」

「ああ、あの芸術性の欠片もない男の倅か。よくもまあ、あんな恥ずかしい作品を世に出したもんだねえ。」

「……へ?」

設楽の口が止まった。一方、私は今にも笑いだしそうだった。

「ふ、ふん! これだから愛を知らない奴は困るよな! 映画の本質つてものがわかってないんだから!!」

「ああ……ごめんよ。どうもああいう恋愛モノは嫌いだね。最後のシーンなんかお笑い種もいとこだよ……。何であんな死に方するかなあ。どうせならみんな殺して自殺したほうが……。」

その発言を聞いていくうち、設楽の髪をいじるスピードが増していく。ああ、とうとう顔が真っ赤になってる。

「……ば、馬鹿が！批評家にでもなったつもりか！行こう、アヤノちゃん！！」

「え、ちょっと、設楽くん！待ってよ！シ、シラリア、また後で連絡するからあゝ！！」

余程、頭にきたのか競歩のスピードで去っていく設楽。そしてそれを健気に追いかけるロリっ子……。あれも一種の恋愛映画のワンシーンになるのかもしれない。

「ありやりや。君のお友達だよね？悪いことをしてしまった……。」

微塵ほどの謝罪を感じさせない声でそう語った瞬間、私は今日一番の笑い声をあげた。

数十分後、私は紙袋一杯にビデオとDVDを詰め込んでいた。

「あの、本当にお金はいいんですか？」

「ん？いいよいよ。そんなマイナー作品、君みたいな子が持っているのが相応しいよ。」

皮肉だろうか。しかし、嬉しくもあった。それじゃあ、と帰ろうとしたとき、男の後ろに、4つ目のダンボール箱を見つけた。何気なく、そちらを見つめると、男はその視線に気づいたようだ。

「ああ、後ろのはレンタル専門なんだけど、良かったら見る？」

「あ、はい！ぜひとも！」

私がそう言うと、男は椅子ごと後ろに向いてしまった。そちら側に来い、ってことだろうか。

3つのダンボール箱を避けて男の前方に回り込む。すでに箱は開かれていて、またもや中にはビデオテープが詰まっていた。

しかし、先ほどとは明らかに違っていたのは、ビデオにはパッケージもなければタイトルも記されていない。修正液のような白い文字で、「1」や、「2」といったナンバーが記されているだけだ。

「あの、これって……？」

「……………」

饒舌だった男が急に黙った。一縷の不安が襲う。

「えっと……………あの……………」

どうやって会話を切り出そうとした瞬間、

「これはね、スターを集めた作品たちなんだ。」

スター？ハリウッドとかの？

「いいや、ハリウッドスターにも負けなくらいのね。」

急に心を読まれて、背筋が凍った。偶然だろうか。

「君は、どうやって殺人鬼が生まれるのかわかるかい？」

……私には質問の意図がわからなかった。何も言えないまま佇む。

「それを記録したのが、このビデオなんだ。」

「……あの、スナッフフィルム……ってことですか？」

やっと絞り出した言葉がそれだ。我ながら馬鹿げた質問だ。そんなチャチなモノではないことは私自身が感じていた。

「僕は、君がその真理を知るに近い存在だと感じているよ。」

そう言われて、思わず口に手を当てる。

いつの間にか、私は口角を釣り上げて笑っていた。

ちょうど、この男の仮面のような顔をしていることだろう。

”どうして犯罪が起きるのか？”ではない。

”どうやって殺人鬼が生まれるのか？”。

何故そう問いかけたのか。意味不明の高揚が私を包んでいた。

「これ、借りてもいいんですよね？」

ふっ、と軽く笑う声が聞こえた。

「どうぞ。君みたいな人は大歓迎だよ。」

そう言って両手を広げる。手のひらは黒の分厚い皮のグローブで覆われていた。

「じゃあ、えっと、やっぱり順番通りに「1」から……？」

「あつ。1番は僕の初仕事だから勘弁してくれないかな？その、緊張しちゃってるもので。」

初仕事って……。いや、深くは聞かない。まずは見てから、ということだろう。

「そうだな、君は9番なんかがいい。」

男が差し出した、「9」と書かれたビデオを受け取る。

「さあ、もう帰ったほうがいい。こんなに遅くなってしまった。」

公園には街灯が点き始めていた。今は19時ごろだろうか。これ以上遅くなるもの困るので、設楽とアヤノが出て行った、公園の入り口へと向かう。

「そうそう。」

男は背を向けたまま、声をかけてきた。

「寝るときは気をつけてね。奴は夢の中でもやりたい放題だからね。」

ん……？夢の中……？ああ、なるほど。赤と緑の横縞のセーターの奴のことだな。

「大丈夫ですよ。恐竜のぬいぐるみが私を守ってくれますから。」

仮面の男の反応を見ることなく、私は家に向かって歩き出していた。

・23時間(前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の、実在もしくは歴史上の人物、団体、地域など、その他固有名称で特定される全てのものは、名称が同一であつても何の関係もありません。

「異議あり！弁護人の殺害方法は理にかなっていない！」

殺人鬼の検事が、殺人鬼の弁護人に向けて人差し指を突き出す。

「この場合は、殺害方法33カ条にひっかかるものであり」

検事が埃だらけの分厚い本を取り出し語り始める。

「ふむ。ならば検事さん、こういう女性には杭が一番だと……？」

椅子に座らされ、猿ぐつわをされていたブロンドの女性の胸に杭が打ち込まれる。法廷内の天井が突き抜けてしまいそうなほど女性の奇声が響く。そのあと、有り得ない量の血が溢れだす。

スクリーンの向こう側では、その後も殺人鬼たちによる熱い熱い論議と検証が死ぬまで行われた……。

”殺人六法”、もとい、”Redrum's Law”。素晴らしすぎる。

低予算により、裁判所での撮影のみが126分にも渡る問題作。

一般的なレビューによれば、「有り得ない光景」「裁判を冒瀆している」「邦題がダサイ」などと辛口のコメントばかりが並ぶ。

しかし恐らくは監督自身の、登場人物を使ってホラー映画に対する意見を徹底的に述べるその熱意。正直、私は、感服していた。

「マイナスの評価がつけばつくほど最高になる」。誰かがそつと語ったそのレビューが、今、心でわかった。

裁判官がハンマーを鳴らす。

それに伴い、画面が暗転し、スタッフロールが流れていく。

決して怖さはないが、それ以上の価値があったのも確か。

1のコレクションBOXに入れておこう。  
蛇足だが私のコレクションBOXは、星の数が少ないほど評価が  
高い。

そして、それは全て私の独断と偏見で整理されている。

「さて……。」

一息つく。

帰ってから、家には誰もいなかった。

姉はどうやら朝言っていたとおり、仕事に向かったみたいだ。は  
やる気持ちを抑えつつ、シャワーを浴びてから夕飯も食べずに、部  
屋に籠って黙々と鑑賞を続けていた。

先ほどもらった作品は今の、ほぼ終わってしまった。

B級の迷作、問題作、と言われる作品群だけあって、1や2  
ばかりに納められた。面白いかどうかはさておき、コレクション目  
的の名作中の名作ばかりである。

今更見なくても（見たいが）、私は十分に満足していた。

そして、目に入ったのは、ベッドの上にはら撒かれたビデオテー  
プ。その中で、私から一番遠くに置かれたもの。

残るは……「9」と書かれただけの無機質なビデオ。別に、後回  
しにしたつもりはないのだが、何故か先に見ては勿体ない気がして  
しまったのだ。それじゃあ早速……いや、今夜はもう十分だ。いつ  
そ、このまま寝てしまおうか……。

「いやいやいやいやっ……！」

一人で否定する。何を憶することがある？

あの男も、少なくとも呪いのビデオではない、と言っていたじゃ  
ないか。

こんなただのビデオだ……きっと、恐らく、多分。

けれど、なかなか身体は動いてくれない。

たまらず枕に顔を埋める。

視界が真っ暗になる。

ああ……この嫌な不安感がどうしても拭えない。強いて言うならそれだけが「不安」だった。

枕から頭を持ち上げる。後ろ目で”9番”を確認する。

もう一度枕へ……と、見せかけて立ち上がる。

ビデオを掴むと一直線にビデオデッキに向かい、

「……ええいつ！」

古ぼけたビデオデッキにテープを突っ込むと、すぐさま再生ボタンを押した。もちろん、私自信を後戻りなんてさせないためだ。

……怖くなんてない。この胸の高鳴りは、期待だ。そういうことだ。

電気を消して、毛布に包まる。環境、心の準備、共に万端で私は臨んだ。

### 青の画面。

ビリビリといった亀裂が何度も入る。その度に恐怖にも似た、妙な躍動感が広がる。

このチープさは故意なのだろうか。まるでホームビデオのような編集の仕方だ。

数十秒ほどその光景を見つめ続けたあと、急に画面が黒くなった。と、その矢先、白く巨大なテロップが浮かび上がった。

今年の夏も、

奴がやってきた……！！

キヤアアアア~~~~！！

「え……？」

B級にはもはや付きものである女性の叫び声。  
え……？だった。そうとしか言いようがなかった。

「これじゃあまるで……」

そして、ブロンドの女性の顔がアップになる。カメラが大いにぶれているのは、彼女の心境を表しているからかもしれない。

その後ろ姿を追う荒い息をした”何か”。映像では、両手を突き出しながら追いかけている。決して早くはないが、遅くもない。まるで獲物をじわじわと追い詰めるように。

そして、その何かが段々と近づいていき……手を伸ばす！

……ブロンドはどうとう追いつかれてしまった。

「B級映画じゃない……」

……声に出すと、ひどく情けなくなった。

安い効果音と共に醜い顔がアップに映し出される。

申し訳程度に巻かれた包帯から覗く顔。”何か”は、想像通り、ゾンビであった。皮膚という皮膚はボロボロで、まるで蒸しパンのようだ。左の眼球があった部分には蛆が湧き、その気持ち悪さを引き立たせている。

はつきり言えば、拍子抜けだった。

確かに見たことない映画には違いない。しかし、今までの作品からしたらお粗末だ。

いや、そもそも最後に見たのが間違いだったのだろうか。仮面の人物の異様に気圧されすぎてしまったのではないか。

そもそも私はゾンビ物をあまり見ないのだ。

それにはちゃんとした理由もある。食欲だけで動いているという本能は評価しよう。しかし、なんと言っても彼らの集団行動が気に入らない。団体で一人一人を殺すことが許せない。

殺人つていうのは、もっとこう、個人で団体を追い詰める恐怖が

……

「……………あれ？」

ディスプレイの中のゾンビは、こちらに背を向けた形で”食事”を始めている。骨を砕く音。動物的な肉を食む音。

人間を食む音が映像として垂れ流されている。女性はもう声を出すこともせず、小刻みに痙攣しているだけだ。

ありふれた光景ではあるが……………どうやらこのゾンビは単独行動をしているらしい。周りに仲間が集まってくる気配もないし、このゾンビが感染源という設定だろうか。

「そりゃ、そうか。まだ序盤だもんね。」

この作品にストーリーがあるのかもわからないが、そういうこと

にしておこう。

見る気も失せたし、このまま寝てしまおうか……。リモコンの停止ボタンを押そうとしたとき、

「はい、お疲れさまでした。」

一瞬、どこから聞こえたのかわからなかった。

あまりにも不自然すぎて、耳を疑ったが、確かに聞こえた。間の抜けた音声が……。ディスプレイから流れていた。

「はあ、すごい食欲ですね、ゾンビというものは。」

どうやら声の主が遠くで撮影をしているらしい。

そもそも、ゾンビ（役者？）に話しかける？そんな馬鹿げた映画があつていいのか？作中作というものだろうか。

いや、そんなことより、この女性、演技にはさすがすぎないか。音も、やけにリアルだ。

ゾンビが立ち上がる。よく見ると、泥と蛆に塗れたスーツを着て、ネクタイまでしている。その姿は新鮮なようで、やはりどこか不自然だ。

私の疑問に答えることなく、ゾンビは何か白いものを吐き捨てた。それを追うようにカメラが動く。コロコロと土を転がるものは、どうやら骨のようだ。

「はいはい、お疲れ様。」

（ え？え？ゾンビが喋った？）

訳がわからないまま、画面を見つめることしかできない。ゾンビは今も横向きのまま、語り続ける。

「なあ、こいつ本当に17歳の女の子なのかい？」

ゾンビは口元に指を当てながら愚痴っている。

「ええ、間違いなく17歳です。」

「ふーん……それにしても酷いアルコール臭だぞ、これ。」

「ありや、本当ですか。不良少女だったんですかね。」

「あと煙草も吸ってるな。ここまでして、わざわざ金髪の女を選ばなくても良かったんだよ。他にいなかったのか？」

ぶい、とカメラに背を向けてしまった。

「いや、やっぱりホラーにはブロンドの女性が得物になるのが常識ですから。」

「……お前の常識には呆れるよ。」

「お決まりってやつですよ。欲を言えば、性行為中にでも襲ってほしかったくらいです。」

「俺に恋人同士の愛の営みを中断させるってのか？風紀委員じゃあるまいし。」

「はい。それがお決まり、ですから。」

満足そうに、声を押し殺して笑うカメラマン。それとは対照的に、ゾンビは不服そうだ。

「大体、俺の食事なんて見てて面白いのか？」

「ええ、さいっごうでした！彼女の恐怖の顔もばっちり撮らせていただきました。」

「……………」

「あ、やっぱり怒ってます？」

「別に……………。ただ、お前がパンを食べてるところをカメラに収められたらどう思う？」

「……………ああ、恥ずかしいような、喉が詰まるような……………なるほど。」

「何とも言えないだろ？俺も今そんな気持ち。」

「ふむ、これは僕のミスですね……………。けれど、ライオンが小動物を追いかける様は十分なほど画になるでしょう？僕からしたらそういうことなんです。」

「ライオンだつて？この俺が？」

そう言つて、肩を揺すつた。笑っている……………みたいだが、皮膚がポロポロの為、無数の穴から空気が漏れる音しか聞こえなかった。それにしても、よく喋るゾンビだ。こんなのが……………モンスターとして存在して良いのか？

「そうですよ。それに、意外と食べてるじゃないですか。結構楽し

めたんじやないですか？」

カメラがゾンビの足元へとズームしていく。

私は、目を離すことができなかった。

女性の顔は、半壊していた。頭の右半分の頭蓋骨は砕かれ、血と脳液がこぼれ出ている。残った2つの眼球は、その意味を失くしたまま存在している。頭から覗く、理科室で見た人体模型のように露わになった数々の組織。

それが、目の前にあった。

ゾンビが食したのだ。本当の人間を。

痛々しいなんてものではない。特殊メイクなんて一切ない。本当のグロテスクがそこにあった。

「ハンニバル」もびつくりですね。それにしても脳みそなんて美味しいんですか？」

それに臆することもなく、淡々と撮影を続けるカメラ。

そのとき、画面の上方向からボロボロの手が伸びてくる。

カメラマンが「あっ」と小さな声を上げると同時に、その手は指先を使って器用に右目をえぐり出していた。

ゾンビは大口を開けて、そこに目玉を招き入れる。そしてまるで飴玉を転がすように口に含んだまま、喋る。

「いや、別に美味しくはないんだなあ、それが。」

「え？そんなんですか？それじゃあ一体」

カメラマンが言い終わる前に、ゾンビは語り出す。

「君らにも同位同食って言葉があるだろう？調子が悪い部分と同じ

部分を食べると……治るのさ。」

「ほほう。ゾンビは脳の調子が悪いのですか？」

「人を頭悪いみたたく言うなよ。俺の場合は、頭痛みたいなもんだ。人の脳を嚼るとちよつとだけ痛みがなくなるんだよ。」

自らの頭を人差し指で小突きながら答える。それを聞いて、カメラが微妙に上下した。

「あははっ！それは”バッテリー”そのものですよ！みなさん！聞きましたか！？あれは事実みたいですよ！」

確かに、どこかで聞いた台詞だ。彼らの理由付けにしては、至極まともな。

「バッテリー……？なんだそれ？」

「知らないんですか？あなたの友達みたいなものですよ。」

「……あのな、以前から何か勘違いしてるみたいだが、俺はゾンビじゃあなくて」

「ありゃ？まずい、そろそろテープが切れるころだ。」

「……話を聞けよ。」

「すみません、例の宣伝、お願いします。」

「なんだそりゃ。知らないぞ。」

「ええ！？一生懸命教えたじゃないですか！」

「知らん。」

「ああっ！クライマックスだっていうのに！こ、これを読むだけでいいですから！お願いしますよ！」

カメラマンが慌てて白い紙を渡すと、ゾンビの全体が見えるところまで距離をとる。

「あんなもん喰ったあとだから気分悪いんだけどな……。」

ゾンビは渋々とそれを受け取ると、紙面に書かれた文字を読み始めた。

「えー、……ご視聴ありがとうございました。No.9はいかがでしたか？ たった今、あなたがご覧になったものは全て現実に行われたものです。映画などではありません。私が、やったのです。」

棒読みの台詞が重く、深く、胸に響く。

先ほどまでの惨状を思い出す。ゾクリと、全身に鳥肌が立ち、背中を汗がったう。

「……しかし、これは合法的殺人です。何故なら私は選ばれたのです。コンテストを勝ち抜きました。数多のライバルを打ち破り、見事に勝利しました。これは、その証です。」

合法的……殺人。

「今から、私は連続殺人犯になりました。その権利が与えられました。そして」

鼓動が早さを増す。私は、この男が次に何を言うのかを、わからないが、恐らく期待していた。

「このビデオを見ている紳士、淑女の皆様、次はあなたの番です。連続殺人犯になれるチャンスです。私たちは、新しいスターを望んでいます。私たちは、私たちが身も凍りつく恐怖を望んでいます。」

ドクドクと血が巡る。呼吸もままならない。

頭がどうにかなりそうだ。けれど、このビデオ同様、停止することとは許されない。

「来る7月24日より、××県 町のマガタ・ホテル跡にて受付をしております。受付の際にはこのビデオをご持参ください。指定時刻は特に決めておりません。お仕事が終わってから、どうぞのんびりといましてください。」

24日…?

すぐさま携帯電話を確認する。今は23日の2時過ぎ………ということとは明日だ。

私の驚きを待っていたかのように、ゾンビが咳払いを一つ入れた。

「ああ〜長いぞこれ……。喉が焼けそうだ。……日々の暮らしに飽きに飽きた紳士、淑女の皆様方、どうぞ奮ってご参加くださいませ。お待ちしております。………」

やっと終わりみたいだが、ゾンビは何か歯切れが悪そうにしている。

カメラマンも不思議がった様子で声をかける。どうやら、まだ続きがあるようだ。

「あれ？あとちょっとですよ？」

「……おい、本当にこれ読むのか？」

「……クライマックスですから。」

「……うえあはは、参加した暁には貴様の脳みそ、この俺がゲチヤグチャと喰らってやるわぁ。後ろには気をつけるんだなぁはあははは。」

「……。」

「……。」

「……はい！OKです！」

「なぁ、こんなのが宣伝になるのか……？」

「なりますとも。ゾンビさんのファン結構いるんですから。」

「……あのな、だから俺はゾンビじゃないって。グールだよグール。」

「え？」

「ゾンビなんて本当にいるわけねえだろ。映画の見すぎだ。」

「……以上、No.9 ” グール” でした。では、ごきげ  
」。

ブツン           とそこで映像は途切れた。

大きく息を吸う。……吐き出す。  
久しぶりにこんな動作をした気がする。まるで呼吸を忘れていた  
みたいだ。

……不思議な気分。

嫌悪、醜悪、残酷、悲惨。言葉は色々浮かぶけれど。

これは……私は今どんな気持ちに当てはまるのだろうか？

いや、それを考えてるっていうことは、全部不正解なのだ。今の  
私には何一つしっくりくる答えが見つからない。

自然と、ベッドに寝転がる。

……それにしても、ひどく落ち着いている。

これはさすがにまずいんじゃないか、女の子として。いや、女  
の子以前の問題かな。ようやく、姉の気持ちが少しだけわかった気  
がする。

普通だったらビデオを叩き割ったり……もしくはビデオデッキ  
と窓から投げ捨てているかもしれない。

私はどうしたらいい？

そういえば、これを撮影したのは、やはりあの仮面の男なのだろ  
うか。

”1番”は初仕事とか言ってたし……。

一体、何者なのだろう……？

私は。

知らない間に、仮面の男の言葉を……思い出していた。

『これはね、スターを集めた作品たちなんだ』

スター……。

No.9はゾンビ……じゃなくてグールの物語だった。

『僕は、君がその真理を知るに近い存在だと感じているよ』

左側へ寝がえりをうつ。目に映るのは真っ白な壁だ。

おかしい。どうかしているとしか思えない。口に出してしまつと、もう後戻りができなそう怖い。

どんなに頭がおかしいと言われたって。これが私の正直な気持ちなんだ。

ここなら、正直に言える。

「すごかった。」

無機質な壁に向かって呟いた。

たったそれだけなのに、もう自分を抑えられなかった。たった、数十分の映像だったのに、ひどく身体が疲れている。それ以上に、気分が高まっていた。

身体が熱を帯びていくのがわかった。

すごい、すごい。本物だ。本物なんだ。

グールの、殺人を見てしまったんだ、私は……！

カメラアングルといい、演出といい、素晴らしすぎる！

あの女性が逃げる様。映画では決して見ることでできない、台本なんていうまがい物で作られたのとは違う表情。

その、リアルさ、何て、何て怖いんだろう！

ああ、ああ、それにしてもあのグールの恐怖と言ったら……！  
思い出しただけで身震いする。

柔らかな女性の肉体に噛みつく、あの歯！あれこそ殺人鬼だ！

あんなのに追われたら、それだけで気が狂ってしまう！  
ぞくぞくと鳥肌が襲ってくる。他人にどう思われたかっていい。  
私は明らかに楽しんでいた、あの作品を。今までの映画では味わ  
うことのできないスリルに、完全に酔いしれていた。  
私も、あんな風に。何かを与える存在にいるのなら。私は何にな  
るのだろう。

……急に、頭が痛い。

それに、何だか眠くなってきた。やっぱり疲れてしまったみたい  
だ。あれだけ立て続けにビデオを見るなんて本当に久しぶりなのだ  
から、仕方ないかもしれない。

まあいい。どうせ今はベッドの上。

このまま安らかに寝てしまおう。

意識が遠のいていく。

今日は素晴らしい夢が見れそうだ。

「……ああ、それにしても。あんなビデオ見せやがって……。一体  
どうしてくれるんだ。」

薄くなる意識の中で、誰かの声が聞こえた。

どこで聞いたか思い出そうとしたのだが、それも段々と面倒にな  
っていく。

やがて、私はいなくなつた。

+ 27 時間（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の、実在もしくは歴史上の人物、団体、地域など、その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であつても何の関係もありません。

## + 27 時間

” 九畝 明のノート ”

被害者：鎌田 かまた 依子 よりこ 17歳（ 高校は中退 ）

家出中の身であり、23歳の彼氏のアパートに同居していた

住宅街の裏山と呼ばれる山中、その遊歩道から遠く離れた場所で殺されていた。

死亡推定時刻は午前4時30分から午前5時の間。

警察関係者から聞いた、鎌田 世津子の彼氏の話によると、彼女は昨夜、一人でコンビニへ行った。

彼女がコンビニへ行くのはいつものことなので、気にも留めていなかった。

しかし、それにしても帰りが遅いことに気付く。（アパートからコンビニまでは30分ほど）

不審に思い、携帯へ電話したところ繋がらない。

コンビニと自宅を往復したが彼女の姿は見つからなかったという。

（コンビニ店員は確かに彼女が来店したのを覚えていたらしい  
後で防犯カメラを確認する必要あり）

そして警察へ通報、という流れ。

何故、山にいたのかは不明。アパートとコンビニの通り道の中間ではあるが、彼女がそこへ寄り道するようなことは今までなかった。

そして、一番の問題は現場の有様だ。

麻駒から話は聞いていたが、実際に見ると私も自分の目を疑った。

顔は半壊し、右目が消失していた（右目は未だ見つからず）。  
身体にはその他に外傷は見当たらなかった。

何か道具を使った形跡もない。

周りには肉片がそこかしこに散らばっていた。

死体は明らかに食されていた。

それも野犬や猛獣の類ではない。

これは警察関係者との情報とも一致している。

曰く、全て人間による仕業だと。

検死の結果はまだなのではっきりしたことは言えないが、この分だと待つまでもないだろう。

恐らく彼女は追われていたのだ。

そして逃げに逃げた先が山の中。

閑静な団地が続くこの通りでは、彼女の叫び声も聞こえなかったのも無理はない（確認の必要あり）

もしかしたら犯人は山へ誘導していたのかもしれない。

そこでとうとう彼女は捕まってしまい、”噛みつかれた”。

その顎は肉を貪り、頭蓋骨を砕き、

「九畝さん、聞き込み終わりました〜！」

そこまで書いたところで車のドアが開き、麻駒は運転席に飛びこむなり大声を上げた。

ノートを途中で終わらせるのは釈然としないが、仕方あるまい。

彼女は話を面と向かって話を聞かないとすぐに機嫌を損ねる。

「お疲れ様、どうだった？」

「どうもこうも、みなさん、知らない、寝ていた、ですよ。疲れちゃいましたよもう……。」

よほど熱かったのか、スーツの胸元をバタバタと煽ぎ、風を送り込んでいる。

私は軽い労いの気持ちとして車内のクーラーを強めにしてやった。

「そうか……。まあ現場から少し離れてるとは言え、ここの住人は無関心だな。普通だったら野次馬目的で逆に色々と聞いてくるくらいだが。」

「時間が時間ですからね。私も昨日は寝てましたよ。」

「ファイル整理してないままな。」

「……ああっ！？も、申し訳ないです！！」

「いいさ、おかげで良い復習になったよ。」

はあ……、とマコマは重いため息をついて、ハンドルに突っ伏してしまった。

本音だったのだが、皮肉と受け止められてしまったようだ。

「まあそれはさておき、どうしたもんかな。」

マコマからの報告が終わったので、ノートを開く。  
書きかけの文章がすぐに目に付いた。

「うわ…今回はいつもにも増してドロドロな内容ですね…」

マコマはノートを覗き込みながら嫌悪な表情を浮かべる。私も書きたくて書いてるわけじゃない。性分だ。

「こんな猟奇的な犯人、大人しく捕まるのかねえ。」

「……どうですかね。少なくとも大人しくないとはいいますが。」

「だろうな。人の脳を食べちゃうなんて……。」

仕事柄、死体は見慣れているつもりだが今回は別だ。

人肉を食したという犯人はいたが、まさか自分がその光景を見せられるとは思わなかった。

当分、肉と言う肉は口に入れたくない。

「うう……もうその話は止めましょうよ。警察もその件については表沙汰にしないでくれて言っていました……。」

「あ、ああ、すまないな。」

マコマは今朝からずっとこの調子だ。無理もないが。

「とりあえず、鎌田 依子が行ったコンビニにもう一度行ってみよう。そこからアパートまでを実際に歩いてみることにする。」

私の意見に頷くと、マコマは車を発進させた。

景色が素早く変わっていく。

こんな事件、放っておいていいはずがない。

犯人は一体どんな人物なのか、一目見てやりたい。

「九畝さん。」

「ん？」

「私たちの仕事は見つけること、だけですからね。危ないことはせずに、後は警察に任せましようよ。」

私の心を読み切ったように、マコマが呟いた。

「……そうだな。」

彼女の探偵という職業の定義はそういうことらしい。

しかし、わざわざ危険なことに首を突っ込んで死にたくないのは私も同感だ。

今回は手がかりを見つけるのも苦勞しそうだ。悪く言えば、もう一度同じような殺人が起きたほうが楽になるかもしれない。

「そつだ！気分轉換しません！？」

彼女が閃いたように叫んだ。

嫌な予感がした。

……予感だけかもしれないので、一応聞いてみる。

「……気分轉換というのは、どんな？」

「やだなあゝわかってるくせに。この近くにケーキバイキングのお店があるんですよゝちゃんと調べてきたんですよゝ。」

始まった。こいつの甘党ぶりには以前から困り果てている。

私が却下するのを察知したのか、続けて捲し立ててきた。

「九畝さんもケーキ嫌いじゃないって言ってたじゃないですか!」

「そう、嫌いじゃない。お前が選ぶ店が嫌いなんだ。私の趣味に合わないんだよ。周りの目が嫌なんだ。」

「またまたあ。そんなこと気にしないでいいですって!」

本当に気にせずにアクセルを踏みこんでいく。

いつものことだが、こいつにハンドルを預けるとすぐにこれだ。

白くなった車内の灰皿を開くと、煙草に火をつける。

こうなったら、その店が爆破でもされて跡形もなくなっていることを祈るしかない……。

「アイスコーヒーお待たせしましたあ。」

間延びしたウェイトレスの声を聞きながら何杯目かのアイスコーヒーを受け取る。

それを少し口に含んで心地よく冷えた苦みを味わうと、ノートへペンを走らせる。

やはり環境が変わると能率も上がる。さっきの事件もなんとか書き終えた。と言っても概要だけだが。

この店に来てから初めての煙草に火をつけた。

「今日の「どうかしてるの!」「見た?」

「見たっ!マザコン夫やばい気持ち悪かった!」

周りでは若い女性たちがテレビやファッションの話などで大いに盛り上がっている。その中にいる私はどう考えても場違いだろう。できることなら早々に出てしまいたいが、煙草とコーヒーと涼しさを味わえてしまう誘惑に逆らう気力は無かった。

「ありゃ？ やつと終わったみたいですね。」

マコマがプレートの許容範囲を遥かに無視した質量のケーキを持ってきた。きながらやってきた。

「事件のせいでケーキも食べられないかも……」と沈んでいた頃が懐かしい。

そして今、彼女は私のプレートを見るなり、訝しげな顔をしている。

「むー、せつかく来たのにまたコーヒーだけですか？」

「煙草も吸ってるよ。」

「……バイキングなのに。ケーキ取り放題なのに。」

天井に向かって煙を吐き出す。まるで背骨が抜かれていくような感覚。それはとても心地の良いものだった。

「あのな、こんな奴がこんな場所でそんなケーキ食べるなんておかしいだろ。視線を感じるんだ。」あなた場違いですよ”っていうさ。

首を振りつつ周りの女性たちを見ながら答える。……ほら、目が合った。

「場違いだなんて、そんな！そんなこと……」

「いいよ、わかってるって。適当にくつろいでるから気にしないでくれ。」

向日葵の形をした灰皿に短くなった煙草を揉み消す。

アイスコーヒーを口に運ぼうとすると、マコマが顔を伏せているのに気付いた。

「みんなが九畝さんを見てるのは…場違いとかじゃなくて…その…」

。

……困った。

何か喋っているのだが、周囲がざわついているため全く聞き取れない……。

妙に顔も赤いし、大丈夫か？

「なあ、おい……やっぱり調子悪いんじゃないのか？無理しなくても今回は……」

「へ、平気ですって！」

こちらが言い終える前にフォークを掲げて嬉しそうにケーキに刺す。……まあいいか。

数本目の煙草に火をつける頃にはマコマもかなり満足した様子だっ

た。

今は”食後の”デザートプリンとアイスティーを食している。

「それで、」

唐突にマコマが話を切り出した。

「ノートをまとめてみて、どうでした？」

事件の話はここではしないつもりだったのだが、一応マコマも自分の職業をわかっているみたいだ。

吐き出した煙は天井へ昇っていき、やがて見えなくなっていく。

「そうだな。皆目見当がつかない。ただの頭がおかしい奴なら散々見てきたが、今回は……」

「頭までおかしい奴？」

「……そうだな。食物連鎖の頂点に立つ捕食者である人類を捕食するなんてな。」

あながち間違っていない事柄に吐き捨てるように答える。

きつと顎から胃袋からつま先まで異常な奴だ。

言葉が通じるのかさえもわからないような。

「なあ、マコマ。人間の脳を食べたいって思うとき、ある？」

マコマは目を見開いて、プリンを食べる手を止めてしまった。

我ながら馬鹿げた質問をしたことに後悔した。

「悪い。」

「……いや、いいですよ。」

さすがに不謹慎だったか、と反省する。

「そうですね、少なくとも私は今まで一度も思ったことないですけど。」

「だろうな……。」

「だとすると、犯人は被害者に相当な恨みがあるとか……?」

マコマがアイスティーの氷をストローで回しながら言った。

「あるいは好意、か?どちらもねじ曲がってはいるが可能性はあるかも。けれど、そのために、わざわざ?」

「……ですよねー。」

ノートを開いて事件の概要をもう一度見る。

こうすることで、見えないものが見える……気がするのだ。思い出したくないが、例の有様を頭で描いてみることにした。

山中、草が生い茂る、林。

サンダルは泥だらけで、片方は離れた場所に。重要なのはここからだ。

空洞になった右目。傷だらけの顔。

頭の内部。白い骨。喉から肩の間が大きく抉られていた。後ろから噛みつかれていた。

被害者は、17歳の若い女性。

衣服は乱れていた……いや、なかったか。

多少の乱れはあったが、それは捕まる前では。

彼女は追われていた。

ただの変質者じゃない。

身体、そちらには興味がなかった。

だとしたら、何故、脳だけを……。

そのとき、2つの文字が浮かんだ。

「……食欲。」

「え？」

知らずに、口に出していた。

「何か言いました？」

「いや……。現場は、何ていうか、動物が獲物を狙うみたいに……食欲で満ちていた気がした。」

自分の考えをある程度言葉にしてみると、頭がはつきりしたような感覚に襲われた。

「まさか……それだけの、食欲のために、彼女を？」

「そう。それも、異常な食欲。」

マコマは信じられない、という顔で私と目を合わせた。  
私だって、信じられない。

自らの食欲を満たすために人を殺し、喰らう。

そんな狂った奴が本当にこの街にいるのだろうか。

……いや、現に犠牲者が出ている。

私程度の常識が通じるはずがない。

おかしいと思うことが、すでにおかしいのだ。これは現実だ。

「そんな……。だとしたら、どうして、その……。」

マコマが周りを気にしているように、声がどんどん小さく低くなっていく。

「もし、もしですよ？食欲が目的だとしたら、それこそ骨だらけになつてるはずじゃあ……。」

最後のほうはほとんど聞き取ることができなかったが、大体は飲み込めた。

そして私には仮想とは言え、その回答も用意してあった。

「そう。純粋な食欲が目的だからこそ、他の部分は残したんだ。残さざるを得なかった、か？」

「まさか、お腹いっぱいになったからってことですか！？」

なるほど、単純だが一理ある、と煙草を吸いながら納得する。

「いや、私の考えは違う。そもそも、それならもつと身体が傷ついていてもいいはずだ。明らかに犯人は頭部、脳を目的にしている。」

現場を思い出しながら話す。

そう、食されたのは喉元、頭、あるいは右目、だけだ。

「……。」

マコマは神妙な顔をして黙っている。しかしここで話を切るわけにもいかない。

「馬鹿げた話だが、」

一呼吸おいて、煙を肺に入れる。

もうあまり美味くはなかったのが残念だ。

「犯人は意外とグルメだったことじゃないかな？」

鎌田 依子の顔写真が載っているページを開く。

「被害者は、不味かったのさ。」

+ 3 時間 (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の、実在もしくは歴史上の人物、団体、地域など、その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であつても何の関係もありません。

### + 3 時間

白い世界。

目の前には本棚。

ノートが隙間なく詰め込まれた本棚。

自然と、腰の高さにあるノートを取り出していた。

これといって何も特徴のない、大学ノート。

表紙を捲る。

そこには、行という行が子供の字で埋め尽くされていた。

どうやら日記のようだ。

何のとりとめのない言葉で、一日も欠かさずに書き綴られている。

今日の朝ご飯、何をして遊んだか、誰と何について話したか。

事細かに、まるでその情景がすぐに浮かぶように。

一段高い場所からノートを取り出す。

少し成長したのか、字もきれいで、文章もまとまってきた。

内容はよくわからない。

けれど、どこか懐かしくて……少し寂しい。

手を伸ばして、さらに高い場所のノートを取り出す。

さっきまでと同じようにノートを捲り……手を止めた。

そこには、何も書かれていなかった。

この世界と同じように。

心臓を掴まれているように、胸が苦しくなる。

次のノートを取り出す。

捲る。

白紙。

機械のように、同じ動作を繰り返す。

何故だろう。

呼吸が止まりそうだ。

続きがないことが、こんなにも辛く、怖い。

忘れてしまった。

ああ、駄目だ。

思い出せ。

忘れてはいけないんだ。

ここでは、忘却は罪。

ノートは私なんだ。

忘れてはいけないんだ。

忘れては

ゆっくりと目を開く。

白い光が開いた目に差し込んで痛いほどに眩しい。

重い右手を動かして、顔を覆う。

「九畝さん？九畝さん？」

間延びした誰かの声がする。

それが自分の名前だと気付くのに、少し時間がかかる。

「あ、まだ動かずにそのままですでいてくださいね。今、先生を呼んでくれますからね。」

パタパタと音がして、誰かが遠ざかっていく。

言われなくても、そのつもりだった。

深呼吸をひとつする。

どうやら、ベッドの上にいるようだ。

身体全体が蜂蜜をかけられたように重く粘りついて、だるい。

このままもう一度眠ってしまったらいいくらいだ。

目が慣れてきたようなので、少しだけ瞼を開ける。

ぼやけているが、きれいに正方形に区切られた天井が見える。頭を動かすと、大きな窓から見える青空と風に揺れたカーテンが見えた。

何を考えるまでもなく、ぼんやりと見ていると、誰かが近づいてくる足音が聞こえてきた。

「九畝さん、はい、ちよつとこちらを向いてくださいね。」

頭を元の位置に戻されて強烈な光を当てられた。痛いくらいに眩しい。

「はい、もう大丈夫みたいですね。」

きつちりと固められた白髪混じりの男が目の前にいた。白衣を着て眼鏡をしている。

先生……医者か？

先生と呼ばれた男は、看護婦に何かを話しかけている。

「……ここは？」

「病院ですよ、九畝さん。」

「病院……。」

なんで病院なんかに？

……ああ、頭が回らない。

何があつたんだっけ……？

マコマ、どこにいるんだ……？

忘れてしまっ。

仮面の男！

「マコママっ!」

自然と体を起こしていた。  
目の前の男に掴みかかる。

「マコママはどこだ!？」

「く、苦し……。」

先生は苦しそうに呻き声をあげるだけで、何も答えてくれない。

「九畝さん! 落ち着いてください!」

呆気にとられていた看護婦が、思い出したように腕に飛びついてきた。

構うもんか。

さらに腕に力を込める。

早く言え。言ってくれ。

殴りつけて口を割らせてやるつか……!

「九畝くん! やめるんだ!」

そのとき、ドアが開く音が聞こえた。

聞き覚えのある声に、咄嗟にそちらに目を向ける。

3人の制服警官と、一人の、中年の男がいた。

「九畝くん、その手を放すんだ。」

いつもと同じ、皺だらけの茶色がかったスーツ。

煙草でしゃがれた声は今後も直りそうにない。  
ハンチングでも被ったら、一昔前の刑事ドラマにでも出演していそ  
うな風貌と物腰。

「磯辺、さん……。」

そう言った途端、自然に、力が抜けていた。

「ああ、ああ、九畝くん、久しぶりだ。」

医者はネクタイや服装を直し、看護婦も胸に手を当てて深呼吸をし  
ている。

それを見て、初めて自分が何をしていたかに気付いた。

医者と看護婦に謝ると、磯辺さんの顔を見ることができなかった。

「恥ずかしいところを見せてしまいましたね……。」

「はは。でも、元気そうで安心したよ。本当にね。」

そう言っつて顔の皺を寄せて笑ってくれた。

恥ずかしいような、嬉しくなるような気持ち。

まるで子供が父親に叱られているようだ。

磯辺さんとの出会いは、私が今の仕事を始めたばかりのことだ。

私はそのころ、とある探偵事務所のバイトとして働いており、資料  
の整理などの雑務をこなす日々を過ごしていた。

そのころ、4人組の銀行強盗による事件が世間を賑わせていた。

大胆にも昼間に行われた犯行は、目撃者も多く、すぐに解決すると思  
われていたのだが、問題はここからだった。

4人組のうちの3人と見られる、男2人と女1人の容疑者がそれぞれのマンションやアパートの自宅にて、殺害されていたのだ。

単なる金を巡つての仲間割れと思われていたが、それよりも警察を困らせたのは、玄関や窓には内側から鍵がかかっているという、いわゆる密室殺人だったことだ。

そして、不思議なことにその鍵は、それぞれの自宅に3人とも別々に置かれていたのだ。

殺人と強盗の容疑者は残った一人に絞られたものの、当然犯人たちの死亡により足取りを掴むことは困難になった。

この不可解で不可思議な事件に心動かされた私は、興味本位から個人的にこの事件を調べていた。幸い、その事務所には数々の事件の資料が山ほどあったので、情報収集に困ることはなかった。

そして調査を進め……ついに真犯人を突き止めた私は、これまた興味本位で（今考えると無謀だが）単身で真犯人の自宅を訪れようとしていた。

こんな犯行を考えた犯人の顔を一目見てやりたいと思ったのだ。

そして、真犯人の自宅前で警察に声をかけられた。ちょうどその間に、目星をつけていた警察も張り込んでいたのだ。

運悪く、警察は私が持っている資料から、犯人の仲間だと勘違いしてしまった。必死に弁明するも信じてもらえないはずもなく、私は取り調べを受けることになった。

そこで仕方なく私は自分の推理を、密室殺人の謎、真犯人の本当の犯行動機を全て話した。

これには警察も驚いたらしい。

しかし、行き過ぎた調査が逆効果になり、一般には報道されていない情報も知っていることから、新たな関係者と勘違いされてしまった。

考えてみれば、当然の話だ。

そんな四面楚歌の状況の中、唯一、信用してくれたのが磯辺さんだった。

磯辺さんは、探偵事務所に何度か出入りしていたので、あまり話したことはないものの初対面ではなかった。

当初は、その関係から哀れな若者を救ってくれたのかと思っていたのだが、後から聞いた話によると、どうやら磯辺さんも私と全くと言っていいほどの同じ推理をしていたらしい。

私の情報と警察の情報を合わせて、確証を掴んだ磯辺さんは、真犯人を逮捕し、とうとう事件は解決した。

私はそれからすぐに、どういうわけか事務所をクビになり、途方に暮れていた。そんな私に独立を薦めてくれたのが磯辺さんだった。

あまり気乗りはしなかったものの、結局はこうして私は自分の事務所を持つことになった。

その後も磯辺さんの付き添いとして何度か事件を解決していくうちに、一般の依頼よりも警察関係者の依頼が増えていった。

このおかげで私も興味のある事件は特別待遇として調査をすることができ、警察も事件を早急に解決できる、という利害が一致したのだ。

この警察との妙な関係は現在も続いており、磯辺さんとも親交を深めることになった。

「連絡を聞いたときは驚いた。まさか、君が病院に運ばれたなんて……。」

腰が痛くなりそうな簡素な丸椅子をベッドの近くに寄せると、座りながら磯辺さんは言った。

「恨みを買ったようなことは何度もしてきました。本当はいつ襲われてもおかしくなかったんですよ。」

そんな筋合いはないことは確かだが。

磯辺さんは両手を膝の上で組むと、何度も頷いた。

それから、これから仕事だと割り切るように声を低くして言った。

「……一体あの晩に何があった？」

私は昨晚あった出来事をかいつまんで話した。

「仮面をつけた男……？」

「恐らく、今私たちが調査している事件の関係者だと思います。」

「人肉を食べたって奴か？」

磯辺さんは目を見開いて言った。

磯辺さんは確か別の事件を担当していたはずだが、やはりこの事件のことは耳に入っているみたいだ。

「ノートも何冊か盗まれました。私たちが襲ったのと、ノートを盗んだ人物……同一人物ではありませんでした。もしかしたらもつと複数かもしれません。詳しくは、後で話します。」

それよりも、まずは聞いておきたいことがある。

さつきから嫌な予感がする。

「……磯辺さん、マコマはどこですか？ここに運ばれているんですよっ。」

すると、磯辺さんの表情が暗くなった。

不安が身体を包みこんで吐き気がする。

「お願いです。磯辺さん。」

自然に握っていた手に力が入る。

「……マコマくんは、無事だ。君と一緒にこの病院に運ばれて、命は取り留めた。」

良かった。

それだけで、良かった。

それ以上はいららないのに。

「いいかい？九畝くん、落ち着いて聞いてほしい。」

どうして、不安が消えてくれない。

「彼女の、意識が戻らないんだ……。」

意識不明。

「詳しくは先生のほうから説明を」

訳がわからなかった。

その言葉の意味も。

目の前の現実も。

「手術は成功しました。しかし、原因がわからないのです。手の限りは」

医者が何かを喋っていた。

どこからか響いてくるその声は、とても遠く、意味を認識すること

ができない。

それは駅の地下鉄のように、何度も反響し、ゆっくりと近づいてくるものの、重く低く、とても暗い。

身体は切り裂かれ。

意識は駅へ。

思考は深淵の奥へ。

視界は灰色に照らされる。

（ マコマ。 ）

呼びかけてみる。

どこにも彼女はいなかった。

白く清廉な部屋には、やがて赤い夕陽が落ちてきていた。

夏だというのに、エアコンが効いているおかげで、あまり暑さは感じない。

ひぐらしだけが季節を知っているように、夏を告げていた。

「 マコマ。 」

何回目かの呼びかけを試みる。

返事はなく、静寂のままの時間が続いていた。望んでいたはずの、静かな、2人の時間。

彼女が起きているときには、そんなのは、ほぼなかった。いつでも楽しく喋っていて、私はそれを聞いているだけで……。

（ すまない。私は……守れなかった。 ）

（あのととき、お前を一人にするんじゃないかった。）

（夕方に電話があったとき、気付いていればよかったんだ。）

（それなのに……。）

声が出ない。

私から話しかけることは、こんな時にしかないのに、吐き出すのは謝罪と後悔だらけだ。

頼むから、もう一度。もう一度、喋ってほしい。

今度はマコマの好きな喫茶店でいいから。

もう、無理な注文もしないから。

もう一度、戻ってきてくれるだけで……。

「ねえ、マコマ。」

いつもよりも、優しく。

ゆっくりと声をかけてみる。

「私は、あのととき、どうすればよかったかな……？」

返事はない。

どうすればよかった？今はどうすればいい？

……マコマ。

そのとき、ドアをノックする音が響いた。

「失礼するよ。」

ドアに視線を送ると、見たことのない若い男が入ってきてるところだった。

男は、私とマコマを一瞥すると、入ってきたドアから二人の男を招き入れた。

知らない顔ばかりで、みんな小綺麗なスーツを着ている。初めに入ってきた男、一番若く見える男が口を開いた。

「初めまして。ええっと、君が……きゆう？く……？」

若い男はいきなり口を詰まらせた。

けれど、誰とも会うつもりも話すつもりもなかった。

そう考えているうちに、後ろの男が何かを耳打ちする。

その後、咳払いを一つ入れてから仕切りなおした。

「初めまして、『九畝』くん。下の名前は『アキラ』で、いいのかな？」

よくあることなので、何も言わずに頷きだけで返す。整髪料を使っていないような髪は、清潔感に溢れていて、温和な笑顔が似合う。そのせいか、スーツ姿は少しも固い印象を感じさせない。

「今回は大変なことになってしまったようで、お察しします。」

月並みな言葉で始められても嬉しいわけがない。早く用件を言ってくれた方が幾分か楽だった。

「そちらのお嬢さんは」

「誰ですかあなたは？」

話が進みそうにないので、自分から始めることにする。

「あ、申し遅れました。科捜研の彫宮です。犯罪心理分析官をしています。」

科捜研……犯罪心理分析官……？どこかで聞いたような役職だ。確か、磯辺さんの後輩が……。

「ああ、確か、マルサイ……。」

マルサイ、と言った途端、明らかに彫宮の顔が引きつるのがわかった。

どうやらマルサイというのはあまり良くない呼び方みたいだ。

「おい。」

ドスが効いた声と共に彫宮の前に一人の大男が立った。護衛みたいだが、物凄い形相で睨んでいるが、制裁でも加えるつもりなのだろうか。

睨み返してやるうかと思つた矢先、彫宮が大男を手で制した。

「いやあ、失礼。久しぶりにそう言われたものですから、びっくりしてしまいました。」

嘘つけ。

人懐こい笑顔を見せてはいるが、さっきの態度は明らかに嫌悪感からくるものだった。役職が高くなればなるほど、形式にはこだわらないものなのかもしれない。

「……こちらこそ、世間知らずなもので。申し訳ない。」

「世間知らず？」

彫宮は目を大きく見開いたあと、急に笑い出した。

「いやいや、世間知らずとはね……。あなたの噂は本庁でも有名なんですよ。話を聞いて、僕も是非一度会っておきたかったです。それが、こんなにも……。若い人だったとは……。」

何か含みのある言い方が気になるが、まあいい。それよりも早く用件を済ましてほしかった。

「用件はそれだけですか？」

「ええ、まあ、一応そうなんです。僕も仕事上、これからあなたに色々と協力してもらわなければなりませんから、その挨拶ということ。」

「それは承知してます。後で署に向かいますから、今は……。」

マコマに視線を落とす。

今は……。どうすればいいんだ？

「……。それもそうです。それでは、また。」

そう言うと、踵を返して、ドアに向かっていく。本当に、用件はそれだけだったのだろうか、と思った矢先、

「ああ、そうだ。」

顔を上げると、彫宮がまたこちらを向いていた。

「九畝さん、犯人の目的は何だったと思います？どうしてあなたは襲われたのでしょうか？」

鼓動が一瞬だけ大きくなる。二つの質問の答えは、私には大体わかっていました。私のノートだ。

「恐らく、私の調査していた資料が目的だったのだと思います。現場から無くなっている資料を調べれば見当はつくと思いますが……。」

「あえて、ノートとは言わなかった。何故だかわからないが、言えなかった。」

彫宮は少しだけ黙ってから、

「……そうですか。わかりました。」

そう言いつと、今度こそ、ドアが閉まった。

+ 2時間（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の、実在もしくは歴史上の人物、団体、地域など、その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であつても何の関係もありません。

+ 2時間

窓の外はもう夕陽が落ちてしまい、すっかり暗くなってしまった。病院の広場の外灯がぼんやりと辺りを照らしている。

結局、いつまでこうしているつもりなのか、自分でもわからない。いくらか落ち着いてきたとは言え、マコマの側にいないと、不安で席を離れることができなかった。

そのうち、私は彫宮の質問を思い出していた。

犯人の目的……なぜ襲われたのか……？

ノートなのは間違いない。

鎌田事件との時機からも、繋がりはあるとみて間違いないだろう。

問題は、彫宮の質問の意図だ。私の仕事を知っているうえで、犯人の目的を聞いておきたかったのだらうか。それとも他の理由が……？そして、仮面の男との会話も頭をちらつく。

……あの時、私は、どうして殺されなかったのか？

ノートを破棄したいのなら、私も一緒に殺してしまえばいいはずだ。何故、マコマだけ……？

「九畝くん。」

ドアのノックの音が聞こえたかと思うと、部屋に磯辺さんが制服警官を一人連れて入ってきた。

「調子は、どうかな？」

「はい、なんとか、落ち着いたと思います。」

酷く疲れていたが、そう言う訳にもいかない。これ以上、磯辺さんに迷惑をかけたくはなかった。

近くにあった、椅子を近づけながら、磯辺さんは優しい顔でマコマに視線を落とした。

「やあ、舞園くん……久し振りだね。」

磯辺さんが、いつもと同じようにマコマに話しかけた。

それだけで、目頭が熱くなる。

マコマは以前から、親を早くに亡くした、ということとで磯辺さんには懐いていたし、磯辺さんもマコマをたまに娘のような扱いをしていた。けれども、今は、返事がない。

「……さっき、彫宮さんと話しましたよ。」

泣きそうになるのをこらえて、冷静に話しかける。

「ああ、犯罪心理分析官殿か。」

「マルサイと言ったら怒られました。」

「なんだって?」

磯辺さんは心底驚いたように言った。

「いや、以前、磯辺さんと後輩の方がそう言っていたのを聞いたものですから、つい……。」

磯辺さんはすぐに後ろの若い警官に目を向けると、警官も困った顔をしていた。

そして、大口を開けて笑い飛ばした。

「そうか、そうか。それはすまないことをしたな。俺らの周りじゃ、あまり名前を気にする奴はいないと思っただがな。まあ、俺もあの若造には参ったよ。ボディガードに散々睨まれてばかりで疲れちまう。」

「どうやら、みんな一度はあれを経験をしているらしい。」

「彼は、本庁から派遣されたのですか？」

「ああ、君の事件があつた日にな。本当は例の惨殺事件を担当するはずだったが、急に君の事件にも首を突っ込んできてな。一応は関連性があるとはいえ、あいつが考えていることはわからん。」

「私が襲われた日に……。」

「それで、九畝くん。」

名前を呼ばれたので、一旦思考を取り止める。

「その、すまないんだが、明日には署に来れるか？」

磯辺さんは言い難そうに口を開いた。私のことを気遣つてのことだろう。今は、ちよつとしたその優しさが染み渡るように嬉しい。

「……そうですね。わかりました。」

「すまないな、こんな状態のときに……。」

「磯辺さんのせいじゃありませんよ。」

「そう言ってもらえると助かるよ。こんなときほど、自分の仕事が嫌になるもんだ……。」

磯辺さんは、そう言っつて肩を押さえて首を回した。

「自分の仕事……。」

そう、磯辺さんは、こんな状況でも自分の使命を果たしているのだ。警察として。私と、マコマのために。

「まあ、こんなときだからこそ、君の力になれるのかもしれないけどな。」

それなのに、私は……。

「磯辺さん、私は……。」

そう、口を開きかけた途端、磯辺さんの手が私の肩に置かれた。磯辺さんと目が合う。

「いいかい？九畝くん。今、君がやるべきことは、君のために時間を使うことだ。」

単純なことなのに、思考が追い付かない。言葉が何度もループするばかりで、意味を理解することができない。

「ここからは、俺達が何とかする。」

「磯辺警部。」

そのとき、病室のドアが開いた。制服警官が入ってきて、背筋を伸ばし、敬礼をした。

「彫宮さんがお呼びです。」

「彫宮くんが……？わかった、今行くよ。」

ドアが閉められると、磯辺さんが席を立つ。

「マルサイ殿は人遣いが荒いね。」

適当な皮肉に思わず、つい口元が緩んでしまう。

「ああ、九畝くん？」

「はい。」

「こいつさ、覚えてる？」

磯辺さんは先ほど一緒に入ってきた、制服警官の頭を叩きながら紹介する。

「後輩さんですよね、磯辺さんの。」

私がマルサイを覚えるきっかけになった一人だ。

磯辺さんは身体を揺らして笑った。

「良かったな。顔は覚えてたみたいだぞ。」

磯辺さんが後輩の背中を強めに叩くと、ふらふらと前に進み出たか

と思うと、ピンと背筋を伸ばした。

「はっ！佐伯と申します！」

廊下にまで聞こえたのではないかというくらい大きな声だった。磯辺さんは更に笑いだした。何が面白いのだろう。

「こいつ、実は君のファンなんだぜ。」

「ええ？」

ファン……？私の？  
有名人でもないのに？

「驚くことはないだろう。あれだけ難事件を解決しているんだ。所轄にも結構いるんだぞ。」

「は、はあ……。」

「まあ、そういうことだから、握手でもしてやってくれよ。」

そう言い残して、磯辺さんは病室を出て行った。

沈黙の空気が流れる。

それもそうだ。こんな状況、どうしたらいいのか全くわからない。

「あの、えーと、佐伯さん？」

「は、はいっ。」

姿勢を正すことなく、目を合わすことなく、ぎこちない動作で答え

る。まるで、おもちゃの兵隊みたいだ。

「ファンって、本当ですか？」

「は、はい、恐れながら……。」

「そんな……でも、私、ただの探偵ですよ？」

「いえいえ！磯辺さんの話や難解な事件の裏には、必ずあなたの名前が挙がっていました。何というか、私は、幼いころより、探偵物のミステリが好きでして……。」

「そ、そうなんですか。」

話してみると、更に困ったことになった。どうやら冗談ではないらしい。

「すみませんが！あ、握手、よろしいですか！？」

「ああ、はい、こんな私でよろしければ……。」

佐伯さんが制服で何度も手を拭いた後、私は握手に応じた。かなり緊張しているようで、手はものすごく熱かった。

「きよ、恐縮です！」

「はい……どうも。」

そんなに恥ずかしがられると、こっちまで緊張してしまう。テレビで有名人が快く握手に応じる姿があるが、あれは相当な訓練をした

のに違いない。

「署に戻りつたら、みんなに自慢できますよ！」

微妙な気持ちで苦笑する。警察に協力しているとは言え、ファンま  
でいるとは……。これからはもう少し身の振り方を考えるべきかも  
しれない。

特に、これからは。

「……でも、それも今日で終わりかもしれませんね。」

「え？」

「今回の事件で、私は、いかに自分が無防備わかりました。事件  
に直接関わることは、もうないかもしれません。」

「……そう、ですか。」

「ごめんなさい。せつかくファンになってくれたのに……。」

「いえ……でも、それでも、私は陰ながら応援し続けます。」

佐伯さんは先ほどよりも、肩の力を落として敬礼をした。  
期待を裏切る結果になってしまった。

そうだ。それでいいんだ。

それが今できる私の仕事なんだ。

後は、警察に任せることが。  
自分の身を守ることが。

「九畝くん！」

そのとき、乱暴にドアを開けて磯辺さんが入ってきた。

「彫宮くんが、」

ゆっくりと首を動かすと、かなり焦っている磯辺さんが目に入った。

「君を、重要参考人として取り扱おうと、本庁に連絡したそうだ。」

佐伯さんが戸惑いの声をあげる。

「そ、それは、被害者として事件に関わっているのなら、当然なのでは……？」

「いや、彫宮くんは、あいつは、君を容疑者にするつもりだ。たった今、俺にそう言ったんだ……！」

容疑者？何の？

「つまり、君がマコマくんを……。」

私が？マコマを？　　した？

「理由はわからないが……どうやら、彫宮くんは君に動いてほしくないみたいだ。」

「そ、そんなこと……磯辺警部、何とかならないのですか？」

「俺だって、こんな馬鹿げたこと許すつもりはない。けれど、上層部が関わってくるとなると……。」

「でも、安全が保障されるならば。。」

視界が暗く、小さくなっていく。

耳は静寂さえも聞き取れなくなり、頭は消火液をかけられたようにドロドロになり思考ができず、手足は人形のように無機物になり、血液もすべて地面に流れ出てしまったように冷たい。

どうなっているんだ？

私はどうなってしまっただ？

私がいけなかったのか？

マコマ。

教えてくれ。

（九畝さん。）

空っぽの体内でマコマの言葉が反響する。

何度も何度も跳ね返って、無機質な音を立てる。

（私たちの仕事は、見つけることだけですからね。）

そう。それが、君の言う、私の使命だった。

今も、そうだ。これからもきつと。

（今、君がやるべきことは、君のために時間を使うことだ。）

磯辺さんも言っていた。

私のために。

自分のために。

今やるべきこと。

私にしかできないこと。

それは。

「わかったよ、マコマ。」

いつの間にか閉じていた目を開くと、マコマが寝ていた。伝わらないのかもしれないけど。

「やっとわかったんだ。私の仕事、使命は、見つけることなんかじゃない。」

聞こえないのかもしれないけど。否定されるかもしれないけど。

「今、この状況で、自分の身を案じることもない。」

それでも、これだけは言っておきたいことがある。

「私の使命は、解き明かすこと。それが、私の存在意義なんだ。」  
それこそが、今できること。

「こんな馬鹿げた事件、すぐに終わらせてくるよ。だから、もう少しだけ、待っててね。」

顔を上げると、先ほどのような空虚感はあるものの、嫌悪感は微塵もなかった。

やるべきことは決まっている。

「磯辺さん、私は私で、これらの事件を解決します。」

「く、九畝くん？」

「だから、協力もできなくなってしまいます。許してください。けれど、目的は同じです。」

「……本当にいいのか？もしかすると、容疑者として、指名手配されるのかもしれないんだぞ……！」

「それはここにおいても同じです。ならば、動いておけるときに動いておきたい。」

「し、しかし……。」

「それまでの時間稼ぎ、お願いできますか、磯辺さん？」

磯辺さんが腕を組んで唸る。

無理なことは百も承知だ。けれど、二百の気持ちは抑えきれない。

「……本当に、君は。」

磯辺さんはこれまでにないほどの大きなため息をついた。

「君は人当たりもいいし、生活態度も素晴らしく、礼儀も正しい。

けどね、喫煙とその頑固さだけは、どうやっても直してくれないな。」

磯辺さんは観念したように鼻で笑った。

「わかった。彫宮くんはなんとかしよう。舞園くんも俺が責任を持つて預かるよ。」



「おいおい……お前顔真つ赤だぞ。」

磯辺さんがまた笑いだした。

「はい。ありがとうございます。私も、大事なファンの期待を裏切るつもりはありませんから。」

と、笑顔を見せたのだけど、上手くいっただろうか。やっぱりこれらを平気でこなす有名人はすごいと改めて思った。

「救急車専用の出入り口から出るといい。それじゃあ九畝くん、しつかりな。」

スーツを脇に抱えて、歩き出す。

面会時間は終わったのか、病院内ではひっそりとしていた。隠れるようにして、一階に下りると、急患を運ぶであろう通路を見つけた。

幸い、看護師や医者もいなかったなので、すんなりと外に出ることができた。

何か月ぶりに外へ出た気がする。燻った肺のなかに新鮮な空気が入り込んでくる。夏だというのに、風が出ていて気持ちがいい。病室から見えていた外灯が夜の闇に浮かんでいる。

上着を着ると、ポケットに懐かしい四角い感触がした。

取り出すと、皺だらけになった煙草の箱だった。中身を確認する。残りは三本だけ。

慣れた手つきで火をつける。新鮮になったばかりの肺はすぐに煙に侵食されてしまった。

（あっちに着くまで、残っているだろうか。）

歩き出しながら、とりあえずの不安は、それだけだった。

病院の一般の入り口には、ここには似つかわしくない、黒いセダンの車が停まっていた。

中には、スーツがきつそうな体格のいい運転手と、まだ若さが残る男が乗っていた。一見、警察の仕事をしていなければ、人気のある塾講師でもやっつていそうな風貌だ。

運転手の男が携帯電話を取り出すと、通話は数十秒で終わった。

「九畝が裏口から出たようです。どうしますか？」

抑揚のない声で後ろの彫宮へ告げる。

「……ああ、やっぱりな。磯辺さんも無茶をする人だ。」

彫宮は病院から漏れる光を頼りにノートを捲る。

「しばらくは放っておくことにしよう。指名手配なんて野暮なことはするなよ。」

さらにノートを捲り、静かに笑う。

「このノート、読んだ？」

「いいえ。」

「去年の今日のことを覚えてるか？」

「……いいえ。」

「普通はそうだ。人間の記憶なんて曖昧で脆い。忘れることが当たり前なんだ。」

運転手はそこで黙った。必要以外の言語を喋ることは彼にとっても彫宮にとっても邪魔なことだった。

「いやあ、九畝くんは実に素晴らしい。これからどうするのか、僕としても観察しがいがある。まずは好きに動いてもらおうじゃないか。」

彫宮はノートを閉じて、両手を組んで、目を閉じる。

話はこれで終わり、という意味だろう。

運転手はそれに気付くと、アクセルを踏み込んだ。

彫宮の笑顔を、夜だけが知っていた。

- 14時間（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の、実在もしくは歴史上の人物、団体、地域など、その他固有名称で特定される全てのものは、名称が同一であつても何の関係もありません。



「ぎゃーっ！」

そのまま間抜けなことに尻餅をついてしまう。

雷鳴のような音が聴覚という神経を通り越して頭の中に直接響く。何が起きたのか全くわからない。

目、眼、瞼は閉じているつもりはなかったが、開けようと努力する。

辺りを見回すと、大体状況がつかめてきた。

立ち込める湯気の中で段々と部屋の輪郭が見えた。

そして恐らく私のであるう足も見えた。

シャワールーム……。

ああ、そうか、シャワーを浴びていたんだっけ……。

大きく息を吸って、身体の力が抜けるまで吐き出す。

シャワーを浴びているときに、ぼーっとしているなんて間抜けにもほどがある。しかも、もしかしたら火傷なんてことも……。

(……一体何をしているんだ私は。)

立ち上がってシャワーの蛇口を捻ると、私に尻餅をつかせたお湯は止まってくれた。

寝耳に水、とは良く言ったものだ。耳だけじゃなく身体全体に、それが熱いお湯だったなら、尚更びつくりする。

などと考えながら戸を開けて、置いてあった服に着替える。

ぶつけた背中が痛い……痣になってなきやいいけれど。

リビングへ向かうと、暗い部屋の中にカーテンの隙間から淡い光が差し込んでいた。

カーテンを開くと朝の光が部屋の中に満ちた。

今日も暑くなりそうだ。

それこそ、朝から熱湯を浴びた私も嫌になるくらいに。

食パンをトースターにセットしながら、冷たいミルクティーを一口飲む。

パンが焼けるまでソファアームに座って、テレビを見始める。

特に見たい番組があるわけではないが、学生にとっては昼間のテレビ番組というものは、欠席しないかぎり見ることができないので、とても貴重なのだ。

「今日は、結婚してびっくり！夫はマザコンだった！、スペシャルです！」

アナウンサーがさも楽しそうに今日の企画を告げる。

そんなの早く別れればいいのに……。

嬉しそうに手元の紙を読み上げているアナウンサーを見て、昨夜のことを思い出した。

風呂上りに自室に戻った時、デスクの中には9番のビデオがそのままに収まっていた。

私自身、夢だったのではないかと疑っていたのだが……。ビデオを見つけた途端、安心したような、興奮が蘇ったような、変な気分だった。

……現在、23日の午前10時すぎ。

あのグールが言っていたことが本当なら、日付が変わった瞬間より例の受付が始まるらしい。

昨夜はあんなに盛り上がっていたものの、いざ考えてみるとすごいことだ。

何をするのかは詳しくはわからない。けれど、何になるのかはわかる。

受付をした者はきつと、あのグールのように、殺人鬼になるんだ。それが彼らの言う、スターなのだろう。

……一般的に言えば、行かないほうが正解に決まっている。

そもそも、あんな胡散臭いビデオを信用すらしらないだろう。だとすると、一般人の私も行くべきではないのかも知れない。ソファアに深く寄りかかって天井を仰ぐ。

シャワーを浴びたせいかな、身体とは逆に、頭は冷めてしまっていた。

そうだ。そうだよ。

大体、そんな話がこの世の中に存在することが、許されるはずがない。

合法的、殺人なんて、許されるはずがない……。

考えがうまくまとまらないまま、呆けていると、キッチンでトースターが短い悲鳴をあげた。

ともかく、出来たてのトーストを食べてしまおう。

食べ終わったらまた考えればいい。

キッチンへ向かうと、先ほど大量に作って置いたミルクティーをカップに淹れなおす。

トーストを一枚取り上げると、皿に乗せ、ソファアに座った。

姉がいるときは、ちゃんとリビングのテーブルで食べないと死ぬほど怒られるが、今日はそんなこともない。”行儀悪く”、テレビを見ながら頂かせてもらおう。

お風呂にマザコン夫と一緒にいる義母と、それを隠れて覗く妻の映像を眺めながらトーストにかじりついた。

\*

朝食という楽しみを簡単に終えた私は、考えを再開しなければならなかった。いや、正確には何をすれば良いのか困っていた。

何しろ夏休みの計画を全く立てていなかったからだ。

もちろん映画鑑賞は綿密なスケジュールを立てて行われる。しかしそれは、もちろんというか、夜限定だった。

一応昼間の鑑賞用に黒い遮光カーテンも買っている、昼間で

も恐怖体験はできないことはないが……。

「……暑い。」

ソファアの上で膝を抱えながら窓の外を見つめて呟く。

太陽は高々と昇り、さらに光を出して存在を強調している。

お昼前でこれだ。日中にはもっと暑くなるに違いない。部屋の窓を閉め切つての鑑賞は中々拷問になりそうだ。

幸いなことに、部屋にはエアコンが完備している。

が、如何せん私はエアコンというものに、肌に合わないというか、非常に弱かった。すぐに体調を崩してしまうのである。

と、なると、どうすればいいのか。

友達を誘つて、夜まで涼しい喫茶店へでも洒落込もうか。

携帯電話に手を伸ばして……すぐに引込めた。

「アヤノは……部活だろうな。」

あれで中々、マネージャーという仕事も大変らしい。夏休みともなれば一日中練習しているはずだ。

それにしても、バトミントンというのは、こんな暑い日に、閉め切つた室内で、どっちつかずな羽を追いかけるのだ。……私には考えられない。

テレビでは天気予報のお姉さんが、屋外で汗一つかいていない顔で、今日の暑さを何度も解説している。

「学生さんはそろそろ夏休みが始まっていることでしょうか、お出かけの際には熱中症に気をつけて。」

そう聞くと、改めて自分の状況が思い知らされる。お出かけはしないので熱中症になることはないだろう。

そう。今の私には”そうなることも”できないのだ。  
せつかくの夏休みに、とにかく私は空っぽだ。

(こうなったら本当に映画を見るしか……。)

ソファーに倒れこむ。

ああ、それにしても困った。

それ以外何もない私。私は困り果てていた。

\*

「あー！もう何で二階に逃げるかなあ!？」

ヘッドホンをしながら、つい興奮して叫ぶ。

画面の中では、黒髪の女性が、自宅にて殺人鬼に追われていた。

一階のキッチンで恋人が殺されたのだ。その光景を見てしまった  
彼女は、なぜか、近い玄関には行かず、わざわざ階段を駆け上がつ  
ていき……

「ああ、ほら捕まった……。」

お約束だ。何年前の作品に憤りを感じても、登場人物はもちろん  
誰も聞いてはくれない。

特徴的なマスクを被った殺人鬼のナイフが彼女の胸に突き刺さる。  
断末魔の途中で停止ボタンを押すと、女性の目が画面いっぱい  
押し出された。

ビデオを取り出すと、元のコレクションボックスへ戻す。

結局、私は映画鑑賞の綿密なスケジュールを、エアコンに耐えな  
がら早々に潰すことになった。

名作はいつ見ても、色褪せることはない。

私のコレクションはいつ見ても完璧だった。

(けれど……どこか……。)

声に出すと、本当にそのとおりになってきそうで、言いたくはない。

言いたくはないが……。

「……物足りない、かも。」

言ってしまうと、自分のスケジュールが酷く陳腐なものに見えてきた。

十本近くの映画を見ておいて、今さらな気はするが。

どうしてだろう。今まではこんなことはなかったのに。

背中のベッドに寄り掛かる。

夏休みの一日目だというのに……その思いが頭を駆け巡る。

始まる前にはあれだけ映画のスケジュールを立てていたというのに、始まってみればこの有り様だ。

ふと、コレクションボックスの外に投げ出されている、ビデオテープが目に入った。

No.9のテープだ。

そうしてぼーっとしているうちに、自然と身体が動きだし、ビデオデッキにテープを押し込んでいた。

再生ボタンを押す。予め、巻き戻しをしておいてよかった。こういうとき、自分の几帳面さは有り難い。

画面には、昨晚と同じような映像が映し出された。

……叫ぶブロンドの女性。

追いかけるグール。

そして、とうとう捕まり、食される。

撮影者との会話が始まる。

「私たちは、新しいスターを望んでいます。私たちは  
。」

イベントの告知。

昨晚と同じ言葉、映像、光景。

そして、昨晚と同じ、高揚があった。

改めて見ても変わらない。

これは、名作だから、という理由だけだろうか。

ゴールは最終的に、謎の脅迫をすると、映像は途切れた。

この経験は二度目だ。

自分の心の中で葛藤が始まる。

世間の私は、行くな、と言っている。狂人の行いだ、と。

しかし、その私は、薄い薄い仮面を被っている。

その仮面を叩き割ると、本性がすぐさま見える。

これは、チャンスなのだ　と。

(狂ってる。)

頭がおかしくなりそうだ。

でも、でも、そのおかしな頭では、もうそれしか考えられなくなっている。

今まで、好き勝手に生きてきた。

嫌なことはせずに、好きな道を選んできた。後悔なんてなかった。しかしそれは、常識と社会という器の中で、だ。器の外へは行つてはいけない、器を壊してはならない、と思いつつも、ビデオを通して透けては見える外の世界が気になって仕方がなかった。

だからこそ、外の世界に似た部屋に自分を押し込めた。目は画面に釘づけにして、ヘッドホンで耳を塞ぐ。ここだけが、この時間だ

けが、私が、私になれる世界だった。今まではそれだけで良かった。けれど、このビデオを見た時から、何かが変わった。自分の空間だけでは抑えきれない衝動が、器にひびを入れていた。私にとって、この動物のような衝動を外に出すことは罪だ。その罪を背負う覚悟が私にはあるのだろうか。

自問自答を繰り返す。

しかし、その衝動は抑え込めば抑え込むほど、ゴム風船のように跳ね返り、後悔を吸収して膨らんでいく。

いつだって、これからだって後悔なんてしたくない。こんなことで、悔いを残すことだけは、絶対に嫌だった。

それが、如何に許されないことだとしても……。

身体が小刻みに震える。

呼吸が荒くなる。

( やってやる。 )

やっと見つけたんだ。抱いてきた違和感を取り除く術を。

部屋の壁掛け時計に目を向ける。

時刻は22時過ぎだ。

集合場所はマガタホテル。

昼間、パソコンで調べたのだが、奇しくも、そこは電車で行けば一時間ほどの場所だった。

まだ電車は十分にある。

( やってやる。 )

ドアにかけてある、カレンダーの前に立つ。

そのカレンダーには、夏休みの終わりまで隙間なく映画のタイトルが書いてある。綿密なスケジュールである。

勉強机から、赤いマジックペンを取り出すと、キャップを外す。

そして、カレンダーの予定欄に一本の線を引いていく。残さずに最後まで。

……これで、全ての予定は赤い線により消失した。7月24日から、9月3日まで。

「夏休みどころじゃないかな。」

これはきつと、普通の夏休みでは味わえない感覚だ。それを食すことにもう迷いはない。

そうだ。もう迷えない。

「一ヶ月ちよつとの殺人鬼、ね……。。」

壮大なストーリーと奇抜な登場人物と深淵のような音楽。私だけの映画の始まりだ。

私の頭の中では、この作品にぴったりの、いくつもの映画のタイトル候補が挙げられていた。

- 4時間(前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の、実在もしくは歴史上の人物、団体、地域など、その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であつても何の関係もありません。

夜の電車というのは、とても風情がある。

窓から見下ろした暗く廃墟となつた街に、明かりをつけた電車が進んでいくのだ。

世界の終りからの脱出のような、切ないような、希望に満ちあふれているような気分になる。

まあ現実には、ピカピカと光る低俗な看板がいくつも並んでいるのだが。ため息をひとつついて、窓から目を背ける。

席は飽きるほど空いてはいるものの、何故だか座る気分にはなれなかった。

電車に揺られながら、マガタホテルについて、昼間調べたことを思い出す。

マガタホテルは数十年前に咲浜市の埋立地に建設された、所謂、一流の高級ホテルの類だつたらしい。当時は、咲浜市の新都として開発が進められていたその埋立地の名物として、かなりの収益を上げていた。しかし、元々交通が不便なこともあつてか、急に開発が停滞し始めてしまい、人々は次々と新都を離れていった。

そして、ついに、過去の栄光を残したままマガタホテルは潰れ、今となつては心霊スポットとしても有名な廃墟になつていた。蛇足だが、マガタホテルで起きた心霊体験はどれもこれも陳腐なものだった。

結局、現在ではその新都（すでに旧都だが）に存在するのは格安のマンションと、小さな企業だけだった。

確か、新都についてクラスメートが話していた覚えがある。家族で引越先を探しに行ったが、遊ぶ場所が何もなかったと文句を言っていた。今では、忘れ去られた都だ。

そんな人が寄り付かない、時代遅れの産物だからこそ、意外と殺人コンテストをするには、格好の場所なのかもしれない。

「本日もご乗車ありがとうございます。この電車は、終点の」  
曇った声をしながら、車掌がアナウンスを告げる。

車両内を見回すと、私を除いて三人しか乗っていないかった。

酔いつぶれたサラリーマン風の男は、先ほどから目を瞑ったまま、しきりに相槌を打っている。

人目も気にせず、自分たちが世界の中心だと言わんばかりに愛し合う若い男女。

そして、私。

ぼーっとしていると、その二人組の女性と目が合ってしまった。

「ねえねえ、あの子、どうしたのかな」

「さあ。家出でもしたんじゃない」

会話は全く聞き取れないが、そんなことを話しているのだろうか。すぐに顔を窓に戻すと、そこに自分の姿が映し出された。

(家出……。)

大体、一番困ったのが服装だった。

殺人鬼っぽい衣装とはどういうものなのか、改めて考えてみればこれほど難しいことはない。映画を参考に、泥まみれの汚い服を来たり、ゴムマスクを被ればいいのかもしいが、それは何だか面白くない。

しかし、考えてみれば、当然かもしれないがサスペンスの犯人は一般的な格好をしている。いかにも犯人だと思つような服装をしていたら、それこそ面白くない。

結局、私は普段通りの服装で出かけることにした。

白い丸襟のブラウスの上に、黒のエプロンスカートとストッキング。肩にはポシェットを下げている。

以前に、服装という趣味にあまり興味はなかった私に、アヤノが無理矢理に店員さんに頼み込んでコーディネートしてくれたものだ。暑いのでサンダルで行こうかと思っただが、装飾だらけで歩き難いので、これまたアヤノが選んでくれた革靴を履いていくことにした。

（まあ……殺人鬼には、見えないかな……。）

何故だか、車両内で自分の存在が酷く小さな物に感じた。

電車はもう少して、新都に着くころだった。

結局、この駅に降り立ったのは、私と中年の二人のサラリーマンだけだった。クラスメートが言っていたように、多少交通の便が悪くとも格安マンションは存在しているのかもしれない。

駅前だというのに、店の明かりは少なく、ほとんどの店が閉店している。今さらだが、どう考えても女の子が一人で来るところじゃない。

近くの掲示板に染みだらけの地図があったので場所を確認する。さすがにマガタホテルの名前は記されていないが、大体の場所は下調べしてある。

線路沿いの道路を歩きだす。

美作の街並みは静かで夜の雰囲気ぴったりだった。綺麗に並べられた街路樹と街灯がいかにも人工的だ。車通りも少ないので、これなら道路を堂々と歩いていても事故は起きそうにない。

一軒家はなく、マンションやビルばかりの建造物は、廃墟にきたような、虚無な芸術がそこかしこに散らばっていた。

車が一台、前方からやってきた。不意に運転手を見てしまったが、

ガラスが真っ黒でよく見えなかった。他に車がないためか、結構なスピードで通り過ぎて行く。急いでいるようにも見えない。頭が冴えてきた。

(……そうか。最後の生存者だ。この街を脱出しているんだ。)

歩きながら、自然と妄想に耽る。

うん、うん、いいぞ。これはいい。

(……ひよっとしたら、街の住人は全て吸血鬼にでもされたのかもしれない。)

自分にしては素晴らしい発想だ。この人の少なさは、そんなことを考えても仕方なくらいの美しさだ。

きっと、この街は一人の吸血鬼により死都と化したのだ。

敵は……そうだ、ゾンビなんかがいい。

(ゾンビの感染力とバンパイアの繁殖力……これはいい。)

どちらが上回っているのだろう。ゾンビの本能的な行動もいいが、バンパイアの理性的な行動も捨てがたい。

未だかつてこんな映画があったら……いや、あった気がする。

あった気がするが、そんな素晴らしい映画では……。

「よろしく願いします。」

「ひゃーっ!」

咄嗟のことに、訳もわからず悲鳴をあげた。

思わず飛び上がり、ひっくり返りそうになってしまい

「あ、危ないっ」

と、腕を掴まれた。

おかげで私は本日二度目の尻もちをつくことはなかった。

「あ、ありが　　あれ？」

「……おや？」

私を助けてくれたのは、見覚えのある顔、

「やあ、お嬢さん。こんばんは。」

いや、仮面だった。

「ビデオを貸してくれた……。」

この前と同じ黒のスーツに、今夜はシルクハットまで被っている。とりあえず、お礼を言つて服装や髪を整える。

人前で悲鳴をあげるなんて、やはり恥ずかしい。

仮面の男は私の心境を読み取ったかのように笑いだした。

「ホラー好きが、悲鳴をあげるなんてね。御法度じゃないのかい？」

「げ、現実と映画は違いますから！」

いつも姉に言われていたことが、初めて役に立った。言い訳としてだが。

これ以上赤くなった顔を見られたくないのので、話を逸らすことに

する。

「……ええと、あなたはここで何を？」

「チラシ配りだよ。イベントのね。」

口に出してから、馬鹿な質問をしたと思った。

あのビデオの持ち主だ。そんなの決まっている。

「……来てくれたんだね。」

仮面から覗く目が細くなった。

私は、黙ってゆっくりと頷いた。

「ああ、それは、今日はなんて、なんて日だ……！」

言葉の節々を噛みしめるように言った。

そして、仮面の男は、急に服装を直し、ネクタイを締め直し、直立の姿勢をとった。

「自己紹介が遅れましたね。」

急に敬語になったかと思うと、シルクハットをとり、頭を下げた。どこかの映画で見たような紳士のような身のこなしに、思わず見とれてしまう。

「私、今回、あなた様のワンダー・スクリーム・ショーへの案内人を務めさせていただきます。ダリオと申します。」

「……ダリオ。」

ただ、意味もなく、その名前を反復した。

仮面の男      ダリオはシルクハットを被り、私を見下ろした。

「ほら、君の番だよ。」

「え？あ、あーっと、私は……シラリア。そう呼ばれてるよ。」

一瞬、私も紳士に習おうかと思ったがやめておいた。

「シラリア……？それが君の名前？」

「そうだよ。本名より好きなんだ。」

「はは。そいつはいい。よろしくね、シラリア。」

そうして差しのべられた右手を、私も右手で握った。

ダリオがそれ以上聞かなかったのも、私としては好都合だった。

「それじゃあ案内するから、ついてきて。」

「え？チラシ配りは？」

ダリオは「あっ」と、思い出したように左手のビラを見た。

そして、その一枚を私にくれた。

チラシには緑と赤の配色の毒々しいフォントでWonder  
S  
cream Showと書いてある。

「君に渡せただけで十分さ。」

そして背中を向けて歩きだした。

ダリオはかなりの高身長で、視界がほとんど遮られてしまう。

「ちなみに、チラシは私で何枚目なの？」

「……ノルマは達成したさ。配るっていうね。」

私は、苦笑しながら歩きだした。

ダリオが辿る道は、路地裏などの狭い道ばかりだった。

しかし、細長いダリオは木の葉のようにひよひよいと進むので、付いていくのに苦労した。

こうして歩いてみると、この街には本当に人の気配がない。

先ほど空想していた、世界が終わったあとの風景というのも、あながち間違いじゃないみたいだ。そう思うと、私の心は不思議と高揚していた。

やがて、10分ほどで大きな建物に辿り着いた。

高層マンションかと思ったが、半開きになった自動ドアの奥には、ロビーらしきカウンターが見える。

(ここが、マガタホテル。)

艶を失くした大理石の床と外壁には亀裂が入り、忘れ去られた場所を物語っていた。

廃墟というものを見たのは、これが初めてだが、これほどとは思わなかった。

誰かに関わっていないと、誰かに忘れられてしまうと、建物でさえも朽ちてしまう。

寒気がするような芸術性に、鳥肌が立つ。

「さあ、着いたよ。」

ダリオが振り向きながら言った。

「すごいだろう？ いかにもホラー映画にありそうな舞台でさ。」

ぼつつと外観を見上げていると、ダリオが私の心を代弁してくれた。

ここでは、どんな殺人鬼が似合うだろう。頭の中でフィルムが回り出し、今までに見てきた殺人鬼のシーンを思い出す。どれも似合いそうで似合わない。ああ、やはりここは管理人がおかしくなる話がいいかもしれない。いや、あれは雪山じゃないとダメかな……。

「シラリアー？ こっちだよー。」

いつの間にかダリオはホテル内へと入っていた。

妄想を打ち消して慌てて追いかける。

ホテルの中は手入れがされているはずもなく、埃っぽく、思わず咳込みそうになるが、思わず、こらえてしまった。文字通り、私は息を呑んでホール内を見ていた。

まず目に入ったのが、入口の真正面にある大階段。二階までしか続いていないものの、扇形に広がっている構造はどこかで見た王宮のようだ。また、一階から最上階までが吹き抜けになっているので、天井が高く、思ったよりも広さを感じる。これだけ壮大な光景だといかに廃墟の雰囲気が良いとは言え、暗さと到る所に木材などのゴミが積み上げられていることがすごく残念に思えるほどだ。

かつては、裕福な人や煌びやかな飾りで彩られていたに違いない。しかし、今はまるで、地震が起きたような、ホテル全体がひっくり

返ったような風景だった。

「こんな、大きな、すごい……。」

文章にならない心からの感嘆の声を挙げると、ダリオがゆっくりと頷くのが横目で確認できた。馬鹿にされるかと思っただけに、真摯に共感されると却って恥ずかしいものがある。

咳払いをして、周りを物色する。埃と蜘蛛の巣とコンクリートの破片が覆いかぶさって、灰に埋もれたような受付では、今では蜘蛛が受付をしてくれるのかもしれない。その向かいには、半開きになったシャッターに遮られた空間がある。棚が並んでいることから、売店だろう。大階段の奥　玄関から見てその隣に位置する場所には、映画館のような両開きの扉が二つある。レストランか、もしくは結婚式場みたいな部屋かもしれない。

扉の前に積み上げられたゴミとも呼べる資材をどかさうとした途端、あることに気付いて振り返る。

「あれ……?」

ダリオがいない。

好奇心ばかりが先行して周りが見えなくなる。迷子になるためのマニュアル通りだ。

「ダリオー……。」

玄関まで戻りつつ声を出す。これだけ広いとは言え、私を置いて行くのは考えられない。すぐに返事があるはずなのだが、私の声が埃に塗れて返ってくるだけだった。

困った。こんな夜中にこんな場所で大きな声を出すのは躊躇ってしまうが、仕方がない。一度、息を吸い込んで、

「ダリ……」

「おい。」

突然、後ろから肩を叩かれた。

ダリオの声じゃない。驚きすぎて声も出せなかった。振り向くと、そこには大きな黒い影がいた。

「ひっ」

顔らしき場所に仮面が見える

ダリオも長身だが、それとは違う。今日の前にいる存在は、単純に、大きいのだ。

仮面をつけているが、ダリオのものとは違う。

「誰だ？なぜここにいる？」

地面から染み渡るような低い声。その迫力に圧倒されてしまう。

「あ、あの、わ、私は、ですね、」

心臓を激しく脈打たせっていると、前方の暗闇に急に淡い光が浮かび上がった。蜘蛛の巣がついたランタンを持ったダリオがいた。

「ごめん、ごめん、明かりを探して　おや？」

ダリオはランタンを前に掲げて、大きな影を照らした。

「やあ、ロメロじゃないか。」

明りに照らされると、その影の異様さがさつきより際立った。ダリオと同じようなスーツを着ているが、泥の中を転げ回ったみたいに汚れている。特徴でもある仮面は髑髏のようで、ボロボロの歯がむき出しになっている。紳士のようなダリオとは対称的に違っただと、一目でわかった。

その左手には、大きなシャベル？スコップ？が握られている。どうでもいいけど、地域によって呼び方が変わるんだっけ？本当にどうでもいい。

「ダリオ。こいつは？」

ロメロ、と呼ばれた男は私から目を逸らさずに顎をしゃくった。

「もちろん、参加者だよ。可愛いだろう、すごいだろう？」

私のことなのだが、何がすごいのが全くわからなかった。

「まさか……お前の？」

「そう！今回僕が推薦するのは、彼女だよ……！」

驚く様子を見せるロメロに、ダリオは新しい玩具を自慢する子供のように言った。その新しい玩具である私は、愛想笑い一つもできずに、この状況の中で、ただ突っ立っているだけだ。

ロメロと目が合う。反射的に笑ってみるが、顔の筋肉が引きつって笑顔が上手くできなかった。

「……ふん、相変わらずお前の趣味はわからん。」

ロメロの視線が外れると、私は呪縛が解けたように、やっと呼吸をすることができた。

「ダ、ダリオ、この人は？」

情けないことに未だに声は震えていた。

「ははは、恐がらなくて大丈夫。彼は僕と同じ案内人だよ。」

ダリオと同じ案内人。彼らにとって、顔を覆い隠すほどの仮面はトリードマークとなっているようだ。

突然、ロメロが近づいてきたかと思うと、右手を差し出された。

「案内人のロメロだ。」

黒い革製のグローブで覆われた、大きく無骨な手。獣みたいな、ゴリラのような手だ。本物は見たことはないが。

そんな手を見つめていると、ロメロは今度は私の右手を掴み上げた。痛いくらいに握られたところで、初めてこれは握手なのだと思付いた。

「よろしく。お前は？」

「……シラリア、です。どうも。」

小学生でさえ、もっと増しな自己紹介ができるはずだが、今の私にとっては、これが精一杯だった。

乱暴に腕を上下に揺らされた後、私の右手は自由になった。

「相変わらず雑だなあ。女の子には優しくするもんだよ、君。」

ダリオはそう言いながら、肩を震わせて笑っている。しかし、ロメロは無言で踵を返すと、出入り口へと歩いていく。

「あれ？どこへ行くんだい？」

「迎えに行く。」

「参加者のこと？」

「そつだ。……今年は、きっと、素晴らしいものになる。」

自信のある、何か含みのある言い方だった。

「……期待していてくれ。」

「ああ、ロメロ。僕も今年は楽しみにしているよ……。」

私はロメロの姿が暗闇で見えなくなるまで、佇んでいた。

今さらだが、これはコンテストなのだ。私以外にも参加者がいるのは当たり前だ。……ロメロみたいなのが一杯だったらどうしよう。

「さあ、シラリア。今度は離れないようにね。」

迷子の扱いをされると、ダリオは大階段の奥へと歩いていく。そこには二つあるレストランの入り口を挟むように通路がある。ちょうど、大階段の裏側でダリオは足を止めると、「ちよつと持っていて」と、ランタンを私に渡した。そして、ポケットから鍵を取り出した。

「宝箱でも開けられそうな鍵ね。」

「面白い表現だね。それに、その表現はあながち間違っていないかもね。」

ダリオは腰の高さほどにある、鍵穴にその鍵を差し込むと回したカチャリ、と音がすると、壁に扉が表れたように（私にはそう見えただけだが）、錆びついた音と共に開いていく。

「パンドラは好奇心に負けて、決して開けてはいけない箱を開けてしまいました。」

まるでおとぎ話を聞かせるような口調だった。

中からひんやりとした風が流れ込んでくる。上へ続く大階段の裏側には、地下へと伸びる階段があった。外側の豪勢な造りとは違い、やけに殺風景に見える。本当に、ただ下る役割を持った階段だ。

「中からはあらゆる災厄が飛び出してきました。病気、悲しみ、貧困、嫉妬……。」

ダリオのその話は知っていた。でも、あれは本当は壺だったんだっけ？しかも、目の前で開いたのは扉だ。パンドラの扉……。

ダリオが私の手からランタンを受け取ると、階段を下りていく。そしてまた思い出したように話を続ける。

「しかし、箱の片隅にたった一粒のきらりと光る粒がありました。それは……。」

それ以上は何も言わずに、私の顔を一瞥すると、歩き出した。少しばかり考えながら、ダリオの後を付いて行く。心なしか、ラ

ンタンの光が弱くなってしまった気がする。  
この扉の奥に入っているのはなんだろう。  
……ああ、そうか。殺人鬼だ。

「それにしても、どうしてホテルにこんな地下が？」

螺旋状になつていゝ階段を、二つの靴音が通り過ぎていく。狭く、暗い通路を頼りない明かりのみで下る。終わりの見えない階段は永遠と地下に伸びているような気がする。靴音だけでは味気ないので、ダリオに色々と話しかけることにした。

「ここは元々、地下シェルターとして造られていたんだ。何せ埋立地だからね。高級ホテルだし、災害対策には特に力を入れていたんだってさ。まあ、ホテルが潰れたあとは僕たちが改造しちゃったんだけどね。」

壁を叩いてみる。ずっしりとした重みと固さを感じる。確かに、素人考えだが、この無機質加減は頑丈そうな造りのように思える。ホテルもまさかこんなコンテストが開催されるとは思ってもみなかったに違いない。

「人を守るためのシェルターが、逆の存在を生み出そうとしているのだから、なんとも皮肉な話ね。」

「本当だね。君もその一人だ。」

ダリオのくもった笑い声が耳に入る。確かにその通りだ。

「そういえば、参加者はどれくらいいるの？」

「えーっと、大体毎年二百から三百人くらいかな？」

「そ、そんなに!?!」

つい、立ち止まって声をあげてしまう。

まさかとは思っていたが、やはり狭き門なのだ。

「それじゃあ……その大勢の中から一人を?どうやって?」

「うん、種目については毎年変わるし、僕たちにも知らされていないんだよ。でも大抵は恐怖とか人数とかシチュエーションに重きを置いているからね。それに至るまでの過程がちょっと違うくらいかな。」

恐怖、人数、シチュエーション……ダリオは多くは語らなかつたが、共通のキーワードは殺人だろう。考えてみれば、とんでもない有り得ない発言だ。

しかし、この世界ではこれが常識であり、これがコンテストなんだ。驚いている場合ではない。私もその一人だ。

半ば強引に自分に言い聞かせる。未だにこの状況に慣れていない自分にいい加減に嫌気がしてくる。

ふと、先ほどの会話を思い出した。

「ロメロが連れてくる人も……だよな?」

「もちろんさ!毎年、ロメロの推薦はすごいんだよ!」

「そう言えば、その推薦っていつのは?」

私の質問にダリオは「うん」と短く返事をした。

そして胸ポケットから金色の懐中時計を取り出す。その風貌のた

めか、蓋を開く姿がやけに似合う。

「僕やロメロみたいな案内人は、言ってみれば、お気に入りだけを一人だけ参加者にすることができんだ。推薦の制度は案内人の趣味がかなり入ることになるのさ。」

そう聞くと、ロメロが言っていた”趣味”という言葉の真意がわかったような気がする。

「僕たちにとって推薦枠はかなりの大本命だよ。稀に一般参加者にも良いのはいるけれど、案内人の推薦はお互いに楽しみにしているんだ。」

「ふーん。それじゃあロメロの趣味って言うのは？」

「アンデッド。不死者だよ。」

心臓が一度だけ跳ね上がる。

まさか、というか、やっぱりというか。私にとって、ロメロなんて名前はゾンビ界の巨匠しか知らないからだ。

「もしかして、あのビデオのゾンビも」

「グールだよ、シラリア。……すごかったらう？」

ダリオが肩を竦めて言った。

ビデオを思い出す。二、三度見ただけなのに、あの風景も顔も細かな音までも、全て思い出すことができる。

今だから断言できる。あれは本物だ。本物の殺意と恐怖だ。

興奮してすっかり忘れていたが、私以外にも参加者はいるのだ。

それも私よりも遙かに強く、狂っている人たちばかりだ。

……あれを目にして、私は立ち向かうことができるのだろうか。急に背筋が寒くなる。自らを抱きしめた腕に爪が食い込む。痛さよりも、現実のがさらに深く食い込んでいる。

「……シラリア、どうかした？」

ダリオが足を止めて振り向いた。言うべきかどうか少し迷ったが、隠していても仕方がない。

「うーん、いや、あんなのと、競って大丈夫かなー、なんて……。」

「ははは、そんなことはないよ。……君は僕が自信をもって推薦できる。」

「ダリオにそう言ってもらえるのはすごく嬉しいけど、私なんて、やっぱり」

苦笑しながら、髪を掻き揚げる。

「シラリア。」

声に気付いて、顔を上げるとダリオの顔がそこにあった。ダリオの目だ。目が合う。

私の顔のすぐ近くでは眩しいくらいにランタンが光っている。

「シラリア、それは、自信っていうやつがなくなったのかい？」

今までとは違う、少し低い声だった。

ダリオの目は大きく、真っ黒だ。いかにランタンに照らされよう

と、その深さは測ることができない。

「自信がなくなっただってどうか」

声が掠れている。喉がカラカラに乾いている。

「ジェイソンに自信ってあるのか？」

ダリオは私から目を離すことなく、ゆっくりと口を開いた。その目で見つめられると、私の身体が透明になってしまったいくよつで、寒気がする。

「フレディに願望は必要なのかい？」

同じ台詞を今度は左手を掲げながら、舞台演技のように振付をする。まるで自問するような言い方だった。

いつの間にか私の手にはランタンが握らされている。

「ブギーマンは恨みを持ってナイフを握るか？ レザーフェイスは焦燥に駆られて女を追いかける？」

背を向けて両手を上へ掲げる。

「いや、違うね！ そんなものはただの言葉だ！ 言葉なんだよ……」

その言葉は何よりも重く、力強さを持っていた。思わず呆気にとられて、その舞台に見入ってしまう。

「いいかい、シラリア。僕に、僕たちに上辺だけの言葉はいらない。

……行動で、その姿で、恐怖を感じさせてくれるだけでいいんだ。」

振り向くダリオと再び目が合う。立ち尽くすだけの私に対して、ダリオの動きはリハーサルでもしたかのように機敏だった。

そういえば、気になっていたことがある。

「ダリオは、どうして私を推薦してくれるの？」

「……僕はね、君のそのホラー映画フリークの発想とここまで来た行動力とそのヒロインのような可憐さに惹かれたのさ。僕の趣味はまさに君のような存在なんだ。君じゃなきゃ、絶対に務まらない。」

「私じゃなければ？」

ダリオの細い手が私の肩に乗せられる。

「僕の名前はダリオ。魔女を生み出しているんだ。」

心臓が身体全体を打ち付ける。

魔女。

そうか、それは『彼』にとって重要なキーワードだ。

ロメロ、ダリオ。彼ら案内人は映画監督の名前を騙り、そのコンセプトにも忠実なのだ。

「……まさか。私が、魔女？」

自分の服装を見直す。これが魔女？

魔女三部作と呼ばれるあの映画は大好きだが、まさか、自分がそうなるとは思わなかった。

「うーん、よくわからないけどなあ……。」

「そんなものだよ。けれど、魔女の目覚めはきつとやってくる。気付くことが大事なんだ。」

「冗談を言っているようには見えない。彼には私の何が見えているのだろう。」

ダリオは再び懐中時計を取り出して蓋を開ける。

「さあ、会場はもう少しだよ。」

パチンと蓋を閉めると、階段を下りて行く。

いつの間にか、不安はなくなっていた。「やるだけやってやる」という、当初の気持ちが不思議と戻っていた。

「魔女かあ。けどなあ……魔法も使えないし、黒猫とも話せないし……。」

過去に見たことのある魔女を思い出してみる。真っ黒な少女のことだ。

「え？なんだいそれ？」

「や、あの、私なりの魔女の定義なんだけど……そんな映画、知らない？」

「生憎と普通の作品は興味なくてね……。」

ダリオは本当に興味なさそうだ。

「そ、そうなんだ。箒で空を飛べたりできるんだけど……。」

「へえー。デッキブラシじゃなくて？」

「……見たことあるでしょ？」

螺旋階段が真っ直ぐになり、更に下る。

すると、ダリオの足音が止まった。背中越しに奥を除くと、ハッチ式の扉がある。防音扉のような重量感が見るだけでわかった。

「結構歩かせちゃったかな。疲れてない？」

「うん、大丈夫。」

少し疲れてはいたものの、ダリオと歩いていると色々な意味で屈はしなかった。きっとこれからも退屈という感情は当分味わうことはないのだ。

ダリオはそれに頷きだけで答える。ランタンを足下に置くと、ハッチに両手をかけて回す。船の舵みたいだ。二回転ほどすると、ハッチが止まる。

扉がゆっくりと開いていく。通路に光が射しこまれていく。

「わぁ……。」

思わず感嘆の声が溜息と共に漏れだす。

狭い通路とは対称的に、そこは広大すぎる空間だった。そこが地下とは忘れてしまうほどの開放感だ。こんな場所が存在するなんて信じられなかった。

その空間に溢れ返る老若男女の人、人、人。全ての種類の人間を集めたように、色々な格好が歩いている。その中に地上よりも明るく、享樂的な屋台のような店が並んでいる。私は人ごみと賑やかな場所があまり好きではないので、テーマパークや遊園地などの施設で遊んだことはないが、きつとこんな雰囲気には違いない。

地上と地下。廃墟と都市。退廃と発展。ここでは全てが逆で、全てが裏に存在する。そして、全てがまぎれもない現実だった。

眩しいくらいの電気に照らされて、私の妄想が加速していく。

「そうか。人が蔓延り過ぎた地上はやがて崩壊していき、人々は地下に潜りこんだんだ……。」

口に出してみると、本当にそう思えてきた。

「そして発展を遂げた？それは中々面白いね。」

こういう共感には素直に嬉しい。

ダリオが後ろ手を組んで歩きだしたので、今度は横に並んで付いて行く。これだけ広くて屋台があると目移りしてしまうので、私なりの迷子対策だ。

「これ、もしかして全員……？」

参加者なのか、とはさすがに怖くて聞けなかった。ダリオは笑いながら肩を竦めた。

「ここは言ってみれば、アミューズメント広場だよ。あつちは映画鑑賞ができる会場とか、あつちには挿入曲を演奏している会場もあるよ。」

「そんなものまで!？」

「ワンダー・スクリーム・ショーはホラー映画好きのお祭りだからね。もちろん、ここでしか買えないものもいっぱいあるよ。」

なるほど。よく見れば、屋台にはレザーフェイスのマスクやブギーマンのゴムマスクが売っている。フレディのセーターもある。こういうものはオーソドックスな感じけれど……。その中でも一際私の目を惹きつけるものがあった。

「ね、ねえ、あそこの店にチェインソーがあるんだけど……。」

屋台の看板には『Chainsaw House』と、虫食いだらけのフォントで書いてある。その壁にはホームセンターのようにチェインソーが並べられている。そして店の前には、目立つようにガラスのショーケースには、いかにも高級品らしくチェインソーが飾られている。

「お、あれはレザーフェイスが実際に使っていたやつだよ。」

「え、え!?! 本当!?!？」

「ってあそこに書いてあるけど……。」

実に、なんとも胡散臭い……。

「むー、撮影に使われたものにしては綺麗ね。」

「本物かどうかは各々が決めればいいさ。で、どうする、買ってみるか?？」

「……うん、ちょっと、欲しい。結構、欲しい。」

ショーケースに貼り付けてある小さな値札を見る。たかがチエーンソー……ではなかった。頭を殴りつけられたような衝撃だ。

テレビでしか見たことのない、宝石だとか高級腕時計の価格に匹敵している。この価格にすることによって、果たして誰が得をするのだろうか。

「こ、こんなの、高級木材でも切り倒さないと割に合わない……。」

「ふむ、人に使うには高すぎるかもね……。」

恐らく私の人生史上一高い買い物諦める。進んだ先には、メジヤーなものからマイナーなものまで、こんな店が飽きるほどあった。驚いたことに、客である人々は欲しいものがあれば、簡単に買っているのだ。マニアとお金持ちの力を改めて思い知らされた。と、言うのもほとんどの品物は高価すぎて、一介の女子高生が手を出せるものではなかった。私が見えるものといえば、アイスとジュースくらいのものだった。

屋台が並ぶ場所から離れ、壁際まで歩くと、他の店とは違う小さなテント小屋があった。チケット売り場のような簡素なものだ。

「さて、コンテストの前に受付を済ませないと。ここで手続きをしてくれるんだよ。」

ダリオに促されるままに小屋を覗く。

ぼうつと浮かび上がるようにして、仮面が見えた。もしかして、案内人？さすがに三回目ともなれば、もう慣れているが、やっぱり異様な姿だ。

ダリオやロメロとは違い、小柄な人物だ。また、彼らの仮面は顔全体を覆い隠すものだったが、こちらは西洋の舞踏会で用いるような、目もとだけを隠す仮面だ。白くて、金色の装飾がとても綺麗だ。唯一見える口元には皺が何本も通っている。

「あの……。」

一声かけると、頬杖をついた仮面の老人は目だけをギョロリと動かした。

「……ん？やあ、お嬢ちゃん。迷子かい？」

「え、いや、そうじゃなくてですね。」

「おいおい、まさか家出じゃないだろうね？」

老人特有のしゃがれた声で笑い出した。

苦笑で返す。心では「またか」と辟易していた。それにしても、私はそんなにかわいそうに見えるのだろうか？

「……家出じゃないです。受付をしてもらいたいですけど。」

「おお！雑技団の人かい？待ってたんだよ、今年は集まりが悪くてなあ。この前の奴らなんか」

と、聞いてもいないことを話し始めた。……全くだめだ、埒が明きそうにない。まだ迷子の扱いをしてくれたほうがマシだった。それを見兼ねた後ろのダリオが助け舟を出してくれた。

「失礼、彼女は僕の　　おや？スタンリーじゃないですか。」

「おうおう、ダリオか。相変わらず細長いやつじゃなあ。」

スタンリー……。なるほど……。今度はキューブリックか。そう思えば、彼の仮面は、最後の作品のものかな？

「まさかあなたが受付係とはね。今年は参加しないと聞いていましたが……。残念ですよ。僕は楽しみにしていたのに。」

「ふ、ふ、ふ、ありがとよ。けどなあ、今年は良いのがいなくてなあ。それで、お前さんはどうだい？」

「もちろん、参加しますよ。それに、今回は最高のものを連れてきました。」

そう言いつつ、背中を優しく押された。ダリオは私を本当に楽しそうに紹介するので、毎回恥ずかしい。

「ええ？だってこの人は雑技団の」

「や！だから違いますって！ダリオー……。」

「スタンリー、彼女が僕の推薦だ。手続きをしてくれるかい？」

スタンリーは驚いて顔を上げた。初めて私を見てくれたような気がする。唯一見える口元から、険しい顔つきをしているのがわかった。

ダリオ、ロメロ、スタンリーと異形の案内人と出会ってきたが、彼らの目は特徴的だ。見てほしくない部分を見ようとするというか、外側ではない皮膚のすぐ裏側を見ようとする目線なのだ。悪意にも

似た好奇心がそこにはあるのだ。

「ほっ！こりゃあいい！お前さんにぴったりだ！」

すると突然、スタンリーは手を叩いて声を挙げた。自然に私も肩から力が抜けた。

「色々が悪かったね、お嬢さん。全く、歳はとりたくないもんだ。」

「ええ、大丈夫です。雑技団はびっくりしましたけど……。」

「はっは……。まあよく考えたらダリオみたいな奴のほう雑技団向きだろうよ。」

ダリオが細長い腕で頭をかくと、私とスタンリーは笑いだした。こうして話すと近所の気さくな老人にしか見えない。

スタンリーは紙と羽根ペンを取り出すと、姿勢を正した。

「よし、すぐに手続きをしよう。推薦だからすぐに終わるよ。それじゃあ……。えー、まず名前は？」

「はい、あの、シラリアです。」

「はいはい。年齢は17歳。と。二つ名はどうする？」

「え、そんなものまで？あの、考えてないのですが……。」

「ふむ、そうか。まあ今はいいか。それじゃあ後々に思いついたら付ければいい。さあ、これでおしまいだ。」

本当に簡単な手続きで済んだ。続いてダリオが用紙に（筆記体で）サインをする。

「もう開会式が始まるから急いだ方がいいぞ。参加者にとっては大事だからな。」

と、スタンリーが鍵を渡してくれた。ここに来たときと同じような鍵だ。それをダリオが受け取る。

「ありがとう、スタンリー。シラリア、行こうか。」

「お嬢ちゃん、しっかりな。思いきり恐がらせとくれよ。」

そんな老人の期待に、笑顔と頷きで答える。私はすっかり孫の気分になっていた。

ダリオと私はテント小屋のすぐ後ろに向かう。そこは無機質な壁しかなかったが、鍵をもらった時点でもう疑問には思わなかった。

先ほどと同じように、小さな鍵穴を見つけると、そこに鍵を挿しこんで回すと、ゆっくりと扉が開いた。今度は階段ではなく、一本の通路だった。

扉が閉まると同時に電気が点く。薄暗い明りとひんやりとした床と壁から何故か刑務所をイメージしてしまう。

「開会式では何をするの？」

前を歩くダリオに問いかける。

「主なのは参加者と種目の発表かな。後は……ああ、しまった、そういうばアピールタイムもあるんだった。」

「え？アピール？」

「自意識過剰な人たちばかりだからね。推薦を受けた人と違って、一般参加者にとってアピールは重要な時間だよ。如何にして恐がらせるか、自分はどんな嗜好を持っているか、ね。すっかり忘れていた……。」

「すまない」とダリオは小さく謝った。確かにそういう重要なことは早めに話してほしかったが、別にどちらでもよかった。

「アピールは絶対にやらなくちゃいけないのかな？私、自信ないんだけど……。」

「いや、強制的ではないよ。君の場合、僕が伝えていなかったこともあるから仕方ないさ。」

「……ダリオはそれでいい？」

「あつはは……。僕のことには気にしないでいいよ。アピールよりも結果が大事だからね。さて、と。」

ダリオが足を止めて振り向いた。その先は予想通り行き止まりだった。ポケットから鍵を取り出した。

「ここがコンテストの会場だよ。今夜はこの会場で終わりだけど、君はここから始まるんだ。」

ゆっくりと頷く。そうだ、もう迷えない。  
。。  
まだはつきりしない自分が確かにいる。けれど、何故か

今はダリオの期待に応えなければ、という思いが強かった。

「大丈夫。魔女になるんだもんね。」

「ああ……そうだよ、シリリア。君が望むのなら、何にでもなれるのよ。」

扉が開いていく。通路に眩しいくらいの光が射しこむ。

その光は、仮面の奥底の、恐らく笑っているであろうダリオの顔を浮かび上がらせてしまいそうだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8163m/>

---

チェーンソーの後に

2011年11月13日09時41分発行